会報 28

1989.4～1990.3

平成元年度

日本大学山岳部
桜門山岳会

会報　第28号

― 目　　次 ―

平成元年度　日大山岳部活動報告 …… 菊　谷　兼一朗 … 1

平成元年度　桜門山岳会活動報告 …… 中　嶋　　啓 … 25

寄　稿

ヒマラヤトレッキング …… 本片山　数　雄 … 27

赤道直下の山 ルウェンゾリ …… 村　口　徳　行 … 30

モンゴルの山旅 …… 原　田　雅　子 … 33

マナスルを越えるツル …… 村　口　徳　行 … 37

追　悼

平沢一久君を憶う …… 戸　村　貞　男 … 42

岳友　佐藤耕三君を偲ぶ …… 前　田　一　二 … 42

登山計画の近況

1．“パミール”ソ連の山々への魅力 …… 中　村　　進 … 43

2．チョー・オユー峰熟年登山隊1991 …… 44

3．マカルー計画 …… 岡　田　貞　夫 … 45

編集後記 …… 47

▲初夏合宿 横尾本谷

活動報告

平成元年度（1989年4月～1990年3月）

部長　沼尻正隆
監督　高緑繁伸
コーチ　古野　淳
主将　菊谷兼一朗

部員　3年　CL菊谷兼一朗　SL中津留茂
2年　山本茂久　渡辺勇一　田端宏好
下村忠幸　野本修　勝又篤
家口寛　秋山登志夫
1年　伊藤英彦　平井伸明　田山将
星野淳　樋口ゆうこ

部室　〒156 東京都世田谷区八幡山2－10－2

―平成元年度活動報告―

CL　菊谷兼一朗

「あっ」という間の1年間だったという気がする。新人勧誘が始まったと思ったら、もう春山合宿となってしまった。昨年度の夏の事故の二の舞だけは繰り返さぬよう、しかし、前年以上の実力を養っていこうと心に誓ったものであったが、それが達成できぬうちに1年は過ぎ去っていく。

とくに富士山においての1年生の事故は無念でならない。リーダーである私個人にしても、その事故からずいぶん心に迷いが生じてきてしまった。登山というものにこれほどの犠牲が必要なのだろうか、それでもまだ登るのは何故なのであろうか。私はそのような考えを話し合うことでもっと山登りというものを深めていきたかったのだが、その時に他にリーダー部員がいなかったのはつらかった。

その迷いを引きずった冬山合宿では、慎重になりすぎたせいか、力を有り余してしまった感が強い。そのような反省のある一方、春からは、雪山を共通のフィールドとし、様々な経験を個人に反映してきたのではないかと思う。本年度は短かったが、一通りの合宿をこなすことができたのではないかと思う。

平成元年度は前年度と同じ2名でリーダー会を出発した。年度始めには目的を話し合い、春山をメインに1年間の計画を進めていくことに決定した。

前年度まではリーダー会が未熟であり、しかも、つたない1年生と共に行なう登山であったが、平成元年度は彼らも力をつけ、クラブ全体の自信へとつながってきた。そのような現状も踏まえ、リーダー2人の頭の中には、前年度からの夢である海外での春山合宿を実現させようという考えが固まってきた。

そのために、全員で月1万円の積立て貯金と、海外の文献集めを行なうこととした。最終的には海外へ行く者だけの積立となってしまったが、海外登山に対しての意識の向上を生んだという意味はあったと思う。

－五月山行－

当初、新人勧誘において女性1名を含む6人の部員が入ってきた。その6人の新人教育も意識し、2年生の実力養成を図る五月山行を計画した。分散形式で登山活動を行なったが、自分の真の実力を知ったものも多かったと思う。この時期からリーダー部員を育てようと考えていたため、2年生にとっては少し背伸びした計画もあったが、それぞれ自分達の実力をはかる意味で、いい山行が多かったと思う。

また、2年生の雪渓技術の完成を意図した雪訓を富士山で行なった。

－初夏合宿－

最初の合宿である穂高の初夏合宿は久しぶりに徳本峠越えを敢行した。新人は女子部員を含む6名おり、総勢18名の大部隊であった。これだけの人数で登山を行なうことに喜びを感じると共に緊張感も強いものであった。

新人訓練を目的に横尾にBCを置き、雨にはたたられたが、OBの参加もあって、それぞれの分散も成果をあげた。この中で、2年以上の部員は合宿終了後に鍋冠山への縦走を行い、体力増強に努めた。この合宿後にサブリーダーの中津留が休部を申し入れ、夏山不参加となり、リーダー会が有形無実化してしまった。登頂の一瞬の喜びを得るための労力を必要以上に感じたときに、無駄なことをしているような疲れを感じるときがある。そんな空気が部内に漂いはじめたのはこの頃からのよう

だ。リーダー会の２本の柱のうち１つが欠けたのだからその影響は大きかった。

夏山合宿も目前に迫り、個人山行、トレーニングなどのクラブのステップアップに力を注ぐことで、全体の雰囲気をより良いものにしていくしかなかった。

－夏山合宿－

夏山合宿は立山東面、内蔵ノ助谷にて定着形式で行なった。一番の問題となったのが、前年度に起こしてしまった事故対策であった。とにかく昨年の因縁の場所である三本歯の通過をどうするかに心くだいた。結局、フィックスロープを張るという面倒極まりない方法をとったが、この方法の良さは、そのついでに浮き石を全部落とすことができることにあったと思っている。そのおかげで２日間の分散登攀は充実したものであった。

前半縦走では大日と薬師から入ってスムーズにＢＣに入ることができた。合宿後の後半分散は上ノ廊下と後立山との２隊が継続して入った。上ノ廊下の１年生２人にとって、後半の笠ケ岳までの縦走は長く感じられたらしく、疲労が色濃くみられた。しかし、去年の雪辱を晴らすことができ満足できた。しかし、一方の後立山の縦走パーティーはメンバー間の不和から途中で空中分解する形となってしまった。残念なことであるが、この時期になって登山中にこのようなことが起こることに人間関係の難しさを感じた。

リーダー１名を欠いた夏山合宿ではあったが、それでも夏山に一応の成功をみたのは、確実に力をつけてきた２年生によるものと評価していいと思う。

その頃から、ヒマラヤ登山について正式に動きだした。当初はＯＢとの合同登山でランシサ・リや、ロブジェ・イーストを検討し資料を集めた。また漠然としたイメージを明確にするため、ＯＢから様々な話をうかがった。トレーニングの状況ははかばかしいものではなかったが、個人山行を多くすることで消化することにした。

－秋山山行－

秋には２年生の積極的参加により、穂高の岩山行と八幡平の縦走、谷川の岩山行が上がった。谷川は雨で登れなかったが、それぞれに楽しむことができた。この時期は今年度の特徴であるバリエーションに富んだ山の楽しみ方を実践できたと思う。

しかし、様々な山に興味を向けたことがチームワークに関してはマイナスに働いたのかもしれない。１年生も相次ぐ退部で３名に減ってしまった。

－富士山合宿－

１年生の骨折事故を起こしてしまい、各方面に多大な迷惑をかけてしまった。この合宿には中津留も参加し、安全に対しては留意したつもりではあったが、事故を防ぐことにはつながらなかった。ちょっとした気の緩みや過信から事故へつながってしまった部分があったように思う。上級生の意識改革により体制をたてなおすことを真剣に考えたが、２年生をリーダーとするには冬山まで待たねばならなかった。

－冬山合宿－

事故がおき、反省を終えた後は、具体的な冬のルートについて再考を迫られることとなった。ヒマラヤ登山を意識し、またメンバーの数のことも考え、剣岳にすることは決めていた。そして当初の予定通り剣岳の検討を始めた。事故のことがあり、また部員の退部も相次ぎ最後までメンバー配分でもめることとなった。色々なルートを考えたが、パーティーを分けるにはリーダー部員がおらず、結局早月尾根に落ち着いてしまった。本来の実力は今少しあるように思うのだが、リーダーとしてはこのルートで精一杯であった。剣岳には多くの大学が入っており、天気も良くあっけなく終わってしまった。

この合宿で、フィックス通過や２年生の実践による雪山技術は、リードできるレベルに達したと思う。その後サブリーダーに山本を迎え、次なる春山合宿に備えることとした。

－春山合宿－

休む暇なく、春山合宿に向けて動きだした。海外の方は学生のみの登山となり、アイランドピークという具体的な目標が決定した。また国内は北海道でのスキー縦走とし、大雪に定め、同時に計画を進めていった。

ヒマラヤの計画をつくるにあたっては、様々なＯＢに話を聞いたり、ヒマラヤ登山の経験者にアドヴァイスを受けたりした。計画を遂行する過程において、ためになる事が多く勉強になった。一方、北海道のパーティーは山本をリーダーとして細部の検討を行なった。１年生にはスキーの訓練として吾妻連峰の縦走もこなし、実践面に備えた。

両者とも異なる危険性が考えられ、それぞれの対策には慎重に時間をかけて行なった。ヒマラヤは初めての高度に対して特に注意した。慎重に思えすぎる計画であったが、現地で起こる数々の事故を見ていると、これでよかったのだと思えた。アイランドピークを登頂し、その後のトレッキングではカラパタールとゴーキョピークに登り、クーンブ山域を広くトレースできた。現地では楽しむことはできたが、いろいろ不備な点も多かった。合宿としての緊張感よりも解放感の方が大きかったからで

はないかとも思う。

しかし、今回の海外合宿で１つだけ言える事は、今後とも「学生による海外登山」を行なう価値は充分あるということだ。特に２年で海外登山を行なったという事は、彼らが４年になった時にもう１度彼ら自身で行く事ができるという事でもあり、頼もしい限りである。

ＯＢの方々には出発前に餞別をいただき、それを保険や緊急対策費として使わせていただいた。現役学生に対してのＯＢのお心遣いには感謝の念に絶えない。

また日本にいる上級生は鹿島槍の天狗尾根を登攀し、力をつけてから３月中旬より北海道に出発し、10日間という長い縦走を無事終えた。スキーの機動性と未知への挑戦を備えた、評価できる合宿であったと思う。

春山合宿は、２つのパーティーが全く異なる山域に向うという変則的な方法であったが、それはとてもうまく行ったようで満足している。また、この山行で２年生はクラブをリードしていく力を得たのではないかと思う。

私がリーダーをとった２年間を振り返ってみると、失敗と挫折ばかりであったように思う。あまりよいリーダーとは言えなかったが、海外での登山を現役で行きたいという夢は実現できてうれしく思う。しかし、この２年間で学んだところも多く、貴重な経験ができたと思う。色々な思いはあるが、今は新しいリーダーにエールを送りたい。大きな夢を持ち、そしてそれを実現できる力を持つ者がいることに、自信を持ってクラブを引っ張っていってもらいたいと思う。

最後に、我々のために貴重な時間を割いていただいたすべての方々に感謝いたしますとともに、今後とも引きつづきご指導をお願いいたします。

平成元年度コーチ会報告

ヘッドコーチ　古　野　淳

ヒマルチュリの事故以来、４年目を迎えましたが、毎年毎年、海外の高峰を目指す登山者は増え続け、遭難は後を断たず、親しかった友人たちが次々と帰らぬ人となってしまいました。高所での遭難は、大部分がエキスパート指向の登山家達のもので、彼らの上昇指向の行き着くところでもあります。しかし、自らの意志でチャレンジを繰り返し、結果として遭難という結末で終えたとしても、それを他人がとやかく非難できるものでないと思いますし、私個人、冒険心のたくさんつまったハートをもつ人を最も魅力的に思い羨ましく感じます。そして、山岳部員の好奇心や冒険心が、未だ見ぬヒマラヤの高山にエネルギーを向けることはとても自然なことであり、未熟ながらも議論を重ねて導き出したきわめてオリジナリティーの高い彼らのヒマラヤ登山計画は評価されるものであり、いまの学生に欠けつつあるものを自ら得ようとする意識はとても健全で好ましいと思います。

昨年度10名、本年度６名の新入生を迎え、平成２年度は既に７名を確保しました。本年度、山岳部活動としてなんとか従来のカリキュラムを遂行できるようになり、技術的には例年のレベルに達したように思えます。しかし、一昨年夏山合宿での落石事故に続き、昨年の富士山合宿でも１年生の平井が骨折し現在も治療中であります。死亡事故こそは免れていますが、部員が増えればそれだけ事故に遭遇する確率も増えるわけで、強力なリーダーシップが要求されます。ところが、学生の気質がソフト指向になって行くなかで、昔のようなリーダー神様論が通用するはずもなく、リーダーもメンバーも双方が望まない人間関係を長期間維持するのはきわめてむずかしいと感じます。今後、リーダーシップの在り方を時間をかけて議論してゆく必要性を感じます。

春山合宿を年間目標にし、初夏、夏山、富士山合宿は例年の場所で行い、無難にこなしております。個人山行に関しては、圧倒的多数を誇る２年生部員の力の向上が目立ち、頼もしいかぎりです。トレーニング量は毎年少しずつですが、減っています。しかし、体力的には例年と大差無く、トレーニングは量よりも質を重視し、もっと科学的に、かつ合理化に改善して行くべきだと考えます。登山計画も「雪の日大」を意識させる傾向が現れ、平成２年度の積雪期合宿が楽しみになってまいりました。気掛かりなのは１年部員の減少で、現在、活動しているのは２名のみとなってしまいました。２年生の元気さに気後れすることなく、田山・伊藤のコンビで、積極的に計画に参加し、何とか４年間を乗り切ってほしいものです。

冬山合宿は久々に剣に入り、早月尾根からオーソドックスにトレースしました。幸いにと言おうか、不幸にと言おうか、またしても天候に恵まれすぎ、予備日に加え、実働日を１日残して登頂し終了しました。春山のヒマラヤ合宿を控えていることもあり、又、来年度に黒部横断という大きな目標をすでに企んでいたためなのか、控えめな合宿になった感がありました。

リーダー菊谷の２年越しのヒマラヤ合宿計画がやっと実り、ネパール・ヒマラヤ、アイランド・ピークへ遠征することができました。当初は、学生全員で参加しよう

と、意気込んで計画しておりましたが、諸事情が重なり4名のみの計画となってしまいました。全員がピークを踏み、さらにクーンブ山群を広くトレッキングしてまいりました。若干20才前後の学生達が自分で計画し、初めての海外の山を学生だけで計画どおり遂行できたことはすなおに評価したいと思います。経験者の同行しないヒマラヤ山行がどんな危険性を秘めているのか。コーチ会とすれば、とにかくマニュアルどおり行動させ、特に高山病については神経質なほど指導したつもりです。

春山合宿はヒマラヤと北海道中央高地との2本を計画し、内容的にも合宿として充分な成果を上げることができました。中央高地の計画は新期リーダー会発足後、次期リーダー2年生の山本をヘッドとして計画を進め、スキーを履いて北海道の山を歩いてまいりました。

本年の活動を振り返って、そして平成2年度に向かって、のびのびと登山を楽しんでいる学生の姿に山岳部の明るい展望を感じます。本年度と来年度は卒業・就職をひかえているリーダー部員がいないことが好要因のひとつになっていると思いますが、3年生リーダーの山本がどこまで部を引っ張って行けるものなのか、期待して見守っていきたいと思います。そして、今回のヒマラヤ合宿に対して先輩諸兄の多大な資金援助を得ることができ、心から感謝を申し上げます。

今後とも、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。　　(1990年4月)

記　録

■五月山行

1．北アルプス剱岳八ツ峰

期間　5月3日～5日

メンバー　L菊谷、田端

5月3日　曇～みぞれ　黒部ダム→真砂沢

雪が多いが、トレースがしっかりついており歩きやすい。しかし、ハシゴ谷乗越しからルンゼを下ってしまい余分に時間を食う。午後からは雷を伴ったみぞれになる。真砂沢CSには8張りほど天幕があり、強風で1張り飛ばされている。

5月4日　快晴　CS→5・6のコル

最初の1本でルンゼの下まで行き、トップで取りつく。Ⅱ峰に直接登り、Ⅱ峰、Ⅲ峰共に残置シュリンゲを利用し、懸垂下降を行う。高度感のある緊張するところだ。5・6のコルには他に4張りのテントがあり、風も弱くシュラフがなくともよく眠ることができた。

5月5日　晴　CS→剱岳頂上→馬場島下山

他のパーティーの後からの出発になった。Ⅵ峰、Ⅶ峰は、前半に比べると登りにはそれほど恐怖感を感じない。八ツ峰の頭は左側を巻いたため登らなかった。剣の頂上では安堵感と共にゆっくりしてから馬場島に向う。

2．北アルプス餓鬼岳より表銀座を経て槍ケ岳

期間　4月29日～5月3日

メンバー　L山本、勝又、秋山

4月29日　快晴　餓鬼岳登山口→餓鬼岳小屋

沢沿いの良く整備された道を行き、魚止ノ滝から尾根に取り付く。地図を見ただけでは良く判らないので、トレースを見つけてそれを追う。その後はザイルを1回出しただけで何事もなく、予定通り餓鬼岳に着く。

4月30日　晴　CS→燕岳への登り 2,723mピークの下のコル

初めの1時間で剣ズリの最高点を過ぎてしまい、ここから一気に 200m位下り、東沢岳の手前に出る。岩峰があるので、トラバースを強いられた。そこで秋山と勝又が滑落したが、2人とも怪我はなかった。その後は順調に進んだ。

5月1日　雪　CS→大天井ヒュッテ

雪が降っているが風はそれほど強くないので出発。北燕岳付近の岩峰帯で少してこずるが、ほどなく燕山荘に着く。中大天井岳に着く頃には風が強くなる。ここから大天井ヒュッテへ下る稜線にはトレースがないが、地図を頼りに下る。

5月2日　快晴　CS→槍ケ岳山荘

右手に槍を従えて稜線を快調に進む。しかし赤岩岳を通過する所で戸惑ってしまう。その後は順調に進み、水俣乗越の上まで着いた。槍ケ岳山荘に時間的にも行けそうなので、先を急ぎ念願の槍へ行く。槍ケ岳の登頂は状態が良くなく、又疲労が激しい為に翌日にする。

5月3日　曇　CS→新穂高温泉下山

物凄い風で目が醒める。朝食後、槍ケ岳の登頂をあきらめることを決める。後はただ飛騨沢をひたすら下り、新穂高温泉に着いた。

3．北アルプス穂高連峰岳沢

期間　5月3日～5日

メンバー　L、OB山本（修）、下村

5月3日　曇～雪　上高地→岳沢

槍沢へ行く岡田ＯＢ、鈴木（弘）ＯＢとタクシーで入山するが、さすがゴールデンウィークで人は多い。岳沢への道は予想通り残雪が多く、穂高も未だに白い。岳沢ヒュッテより10分ほど降りた場所でツェルトを建てる。その後は南稜の偵察と下村の雪訓をやり、明日に備える。

5月4日　快晴　ＣＳ→横尾

他のテントがうるさくて３時半に起床する。南稜取付きまでは雪崩の危険性もあるが、昨日の降雪も少なく、また早朝でもあるので、あまり神経質になることもなさそうである。南稜は状態も良く、難無くこなし奥穂に着くが、頂上は人が多く下山は順番待ちをした。予定では涸沢までだが、雪に埋もれた横尾本谷を横尾まで下ってＣＳとした。

5月5日　晴　ＣＳ→上高地下山

山本ＯＢの都合で２時起床、真夜中の横尾を歩き出し、早朝の上高地に到着する。

4．南アルプス鋸岳

期間　5月1日～6日

メンバー　Ｌ中津留、野本

5月1日　雨

家口の足の捻挫による不参加や、雪の状態を出発前に考慮した結果、鋸岳より鳳凰三山へ行くことにした。時間に余裕があったので、夜ではなく昼新宿を出発した。富士見駅でタクシーをひろい、大昭和製紙の林道を行けるところまで入って、テントを張る。

5月2日　快晴　ＣＳ→横岳峠

朝、中津留の調子が悪く、９時15分出発。最後の砂防ダムを越えると、道はとぎれとぎれしかなく、へつりや渡渉も出てきた。源流部は、すさまじいやぶであった。出発が遅かったせいもあって、横岳峠にたどりつくのがやっとであった。

5月3日　晴～雪　ＣＳ→第二高点

第一高点の急な登りで野本がスリップしたが約３ｍ下で止まった。その後大ギャップの登りで中津留のアイゼンのバンドが切れたが、野本にトップで行ってもらいなんとかピンチを脱する。時間が遅かったために第二高点の直下でテントを張るが強風のためポールが折れる。

5月4日　快晴　ＣＳ→駒津峰

出発して間もなく、中の川乗越の下りで40ｍのアップザイレン。三ツ頭までかなりのアップダウン。15時30分に甲斐駒の頂に着き、駒津峰の上でブロックを作りテントをかぶって寝る。

5月5日　晴　ＣＳ→早川尾根小屋

今日は出発が遅れたが、早川尾根小屋では駒大山岳部と会い親交を深めた。

5月6日　曇　ＣＳ→夜叉神峠下山

オベリスクまで行き駒大３人と写真を撮り、広河原に下ったが、あると思っていた交通手段が何もない。仕方がないので夜叉神峠まで15km歩いた。

■初夏合宿

――穂高岳横尾定着――

期日　6月14日～20日

メンバー　Ｌ菊谷、中津留、秋山、田端、下村、渡辺、野本、家口、勝又、山本、伊藤、田山、平井、星野、樋口、大越、ＯＢ古野、目黒

6月14日　晴　新島々→岩魚留

昨年に勝る18名の部隊である。１年生は辛そうであるがよく頑張り、予定通り目的地に着く。

6月15日　雨　ＣＳ→徳本峠→横尾ＢＣ

▶初夏合宿 雪渓訓練

▲停滞日にチロリアンブリッジをする

重い荷を背負っての徳本峠越えはきついものである。峠の登りの始まる所で隊を２年中心と１年中心に分けて進む。１人の脱落者もなしに峠に着き、隊を合流する。ケルンに参拝した後、全員無事にＢＣに着く。

６月16日　　雨　ＢＣ⇔本谷橋

食事の準備が遅れ、出発が遅れ、統一感のなさが表に出た。とりあえず本谷橋まで進み、歩行訓練を始めるが、雨がひどくＢＣに午前中に戻り停滞とする。

６月17日　　晴　雪渓訓練

上級生は１日中、マンツーマンで１年生の指導にあたる。残雪は例年より多く、雪渓訓練にも熱が入る。下りは走りながら横尾に着く。

６月18日　　曇～雨　分散登攀

①槍　②前穂北尾根　③奥穂　④北穂東稜

体調が悪いもの２名を除き、分散登攀に出る。しかし１名が体調悪くＯＢに連れられ、ＢＣに戻ってくる。一部で仲違いが起こり不安点が浮かび上がった。

６月19日　　雨～曇　停滞

空模様がおもわしくなく、ＢＣで休養となる。デモンストレーションあり歌ありで、山での楽しみにひたる。

６月20日　　曇　ＢＣ→下山

①上高地　②大滝山→小倉

１年中心に上高地、２年中心に小倉下山とする。小倉下山は林道に出てから時間がかかり、大変であった。

■夏山合宿

―― 立山東面内蔵ノ助左俣定着 ――

期日　７月24日～８月５日

メンバー　Ｌ菊谷、秋山、田端、下村、渡辺、野本、家口、勝又、山本、伊藤、田山、星野、樋口、ＯＢ高緑、石川、目黒

＜入山＞

１．薬師パーティー

期日　７月24日～27日

メンバー　Ｌ渡辺、勝又、田端、伊藤

７月24日　　晴　折立→薬師峠

折立からの登りはいつもながら苦しい。しかし、ＯＢの差し入れを１本のたびに食べて元気をつけた。今年は天気が良く、去年とは別のところのようだ。良いペースで歩き、昼過ぎに薬師峠に着く。

７月25日　　晴　ＣＳ→スゴ乗越

今日は伊藤も荷物を軽くしたので調子が良いようだ。スゴ乗越に１時に着いてしまった。

７月26日　　曇　ＣＳ→五色ケ原

今日は伊藤も荷物を担ぎ早いペースで歩いたので、あっと言う間に着いてしまった。途中、風がとても強く、なかなか大変であった。明日は早くゴルジュを通過したいので、午後５時には寝ることとする。

７月27日　　晴時々曇　ＣＳ→雄山→ＢＣ

今日は最初から飛ばした。伊藤も頑張る。気合で雄山の登りを越えると、もうＢＣは近くだ。10時半の交信で大日隊、室堂隊の元気な声が伝わる。山荘で全員と顔を合わせ、ＢＣへ下る。

２．大日パーティー

期日　７月25日～27日

メンバー　Ｌ菊谷、野本、下村、田山、ＯＢ高緑

７月25日　　晴～曇　称名の滝→大日小屋

前日に菊谷、下村の２人で後半分散用の荷物を黒部ダムにデポし、立山駅で全員と合流する。２本目で田山がバテ、下村も調子が悪く、ゆっくりしたペースになる。大日小屋では現在テントが張れないらしく、プレハブ小屋に無料で泊めていただく事となる。その他、不手際が多く先行き不安が募る。

７月26日　　晴時々曇　大日小屋→雷鳥沢

みそ汁とご飯だけの食事を済ませて出発。室堂乗越からの下降路で雪渓の直下降が現れ、田山がスリップしたため、フィックスロープを使って下降する。

７月27日　　晴時々曇　ＣＳ→内蔵ノ助山荘→ＢＣ

雷鳥沢から真砂沢経由で真砂岳へ登るコースを取る。次第に風が強くなり、ガスと共に横殴りに吹いてくる。内蔵ノ助山荘に着き、他パーティーを待つ。11時半に高緑ＯＢと別れ、12時頃から下降の準備をする。ゴルジュではフィックスを２ピッチ張り、ザックを１つずつ降ろす。途中、不注意からザックをシュルントに落としてし

まい、回収に時間を食う。安全な方法を取ったつもりであったが、時間がかかり過ぎてしまった。しかし、なんとか明るいうちにＢＣ入りすることができた。

３．室堂パーティー

期日　７月26日～27日

メンバー　Ｌ家口、秋山、星野、樋口

７月26日　　晴時々曇　室堂→内蔵ノ助山荘

荷物が非常に重く、15分位しか歩けない。荷物を置く石を探してはガンバリの繰り返しだった。今年は雪量が多くて歩荷道を探すのに１時間位かかった。

７月27日　　晴時々曇　内蔵ノ助山荘→室堂→内蔵ノ助山荘→ＢＣ

デポを取り、星野、樋口と合流するために室堂に下りる。その後、内蔵ノ助にて皆と合流。

＜定着＞

７月28日　　晴　停滞（ＢＣ整理）

菊谷、家口の２人で三本歯のコルにフィックスを張りに行く。落石の危険がある箇所の草付きの方に15mのロープを張る。ＢＣでは薪拾い、ハイピーシート張り、天幕地の掘り出し等を行う。

７月29日　　霧～雨　雪渓訓練

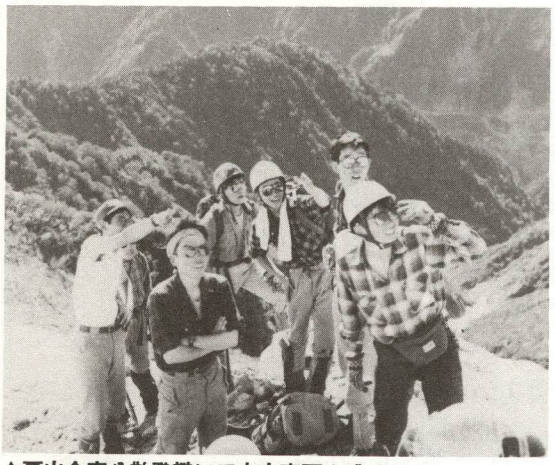
ガスや霧雨で体が濡れてしまい、寒い。直登直下降の後、カール底でツェルトにくるまり休む。

７月30日　　曇　雪渓訓練

石川ＯＢ、目黒ＯＢと合流する。１年１人に２年２人を付けてザイルワークの訓練をするが、コンテまで終わらせることができなかった。

７月31日　　晴　雪渓訓練

本来はスペアであったが、昨日完成しなかったコンテの完成のため今日も行動。上級生はゴルジュの駆け上がりをする。



▲夏山合宿分散登攀にて立山東面を眺める

８月１日　　雨　停滞

三本歯のコルへ向かうが、１本目で雨が降り出したのでＢＣに戻り、停滞を決定する。

８月２日　　曇～雨　ＢＣ⇔雄山

朝から台風12号の影響で天気が悪く、一時待機とする。その後、家口リーダーで雄山を往復する。

８月３日　　晴　分散登攀

①中央山稜主稜　Ｌ菊谷、田端、秋山、星野

②ニードル稜　Ｌ目黒、家口、下村、田山

③支稜　Ｌ山本、野本、伊藤

去年の二の舞を繰り返さないためにも、三本歯のコルの通過は慎重に行う。台風が来ているとは思えないような良い天気である。全員が合流した後の最後の１ピッチのトラバースは、フィックスして通過する。

８月４日　　晴　分散登攀

①中央山稜主稜　Ｌ目黒、野本、家口

②ニードル稜　Ｌ山本、秋山、星野

③支稜　Ｌ菊谷、田端、下村、田山

目黒ＯＢが下山することを考えてのメンバー構成とする。ニードル稜隊が大幅に遅れたため、目黒ＯＢが降りた後、昼寝をしながら待つ。最終日ということで、歌を歌ったりスペシャルを食べたり楽しく過ごした。

８月５日　　曇　ＢＣ→黒四ダム下山

出発が遅れてしまい、黒四ダムに着いたのもぎりぎりバスに間に合う時間となった。最後のダムの登りの長さに全員汗だくとなり長い合宿も幕を閉じた。

＜後半分散合宿＞

１．北アルプス黒部川上ノ廊下遡行

期日　８月６日～14日

メンバー　Ｌ菊谷、野本、星野、伊藤

８月６日　　曇～雨　黒四ダム→奥黒部ヒュッテ

昨日のデポの回収が遅れ、本日、回収する。ペースを上げて平ノ渡しに着く。途中から台風の影響で雨の中、奥黒部ヒュッテに着く。

８月７日　　晴　停滞

水量が増えているため停滞とする。

８月８日　　晴　ＣＳ→口元のタル沢手前

今回、初めての渡渉である。苦労しながらテントサイトに着くが、距離がさほど進んでいない。

８月９日　　晴　ＣＳ→金作谷出合

下ノ黒ビンガ核心部があり、上ノ廊下で一番苦労した

1日であった。滑落したり、水で流されたり、ハプニングの連続であった。

8月10日　曇時々雨　CS→立石奇岩

久しぶりに寒い1日となった。渡渉の連続であったが、次第に河原歩きが増えてくる。立石奇岩は一見の価値有り。

8月11日　晴　CS→赤木沢→五郎平

赤木沢は噂どおりきれいな沢で、急いで抜けたのが惜しまれる。最後はお花畑を経て稜線から長い縦走を行う。1年に疲れが出てくる。

8月12日　晴　CS→双六小屋

最初にルートを間違え、時間を無駄にしてしまった。そろそろ食料に関しての話題が多くなってくる。

8月13日　晴　CS→笠ケ岳

ジョギングシューズでの行動のため、捻挫しないように慎重に歩く。早く着いたため頂上を往復する。

8月14日　雨　CS→槍見温泉下山

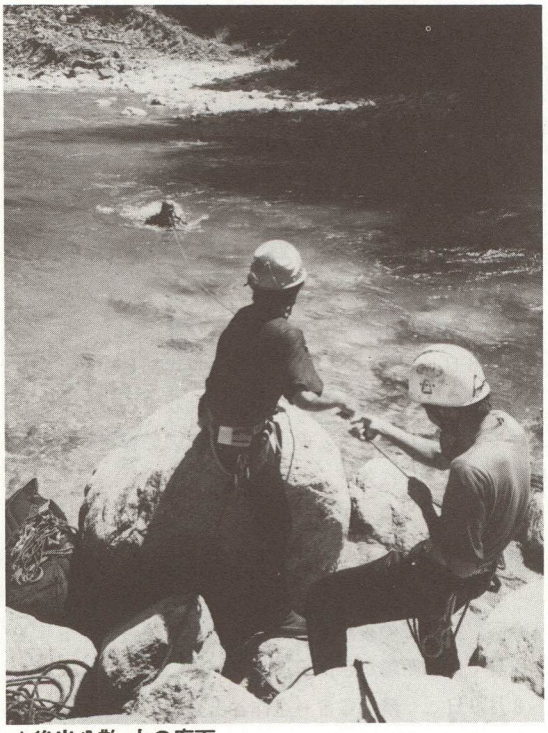
最後、天気に恵まれなかった。露天風呂に入り合宿を全て終了する。

2．北アルプス後立山～日本海縦走

期日　8月6日～12日

メンバー　L秋山、下村

8月6日　曇～雨　黒四ダム→南小沢出合



▲後半分散 上の廊下

上の廊下隊と出会ったり、別れたりしながら平ノ渡しまで行く。天候が悪くなり、南小沢出合の安全な所で1日を終える。

8月7日　晴　CS→針ノ木小屋

水量が増し、渡渉も大変であった。

8月8日　晴　CS→爺ケ岳→冷池山荘

左手に黒部湖を従え、快調に歩く。遅れを取り戻すため予定より距離を伸ばす。

8月9日　曇時々雨　CS→鹿島槍ケ岳→唐松山荘

キレット通過は予想したほどでもなく、そのかわり五竜岳の登りは大変であった。その夜、寒冷前線の通過のためテントのポールも折れる程であった。

8月10日　曇～雨　CS→白馬宿舎

単調に山を登り、下ってテントサイトにつく。

8月11日　晴　CS→白馬岳→長栂山尾根上付近

今日で長い後立山と別れ、朝日岳を経て栂海新道に入る。しかし、ルートをまちがえた所で日も暮れ、テントを張る。その夜、2人で相談した結果、明日下山することとなる。

8月12日　晴　CS→蓮華温泉

早朝、即座に下山を始め、昼過ぎに温泉に着く。そこで別れ合宿をうち切った。

3．北岳バットレス（白峰御池小屋定着）

期日　8月9日～12日

メンバー　L山本、勝又、家口

8月9日　快晴　広河原→白峰御池→北岳→BC

大樺沢の雪渓を登る。bガリー大滝に取り付き、途中ルートを違えながら二尾根に取り付く。RIルートは、高度感と適度な緊張感と爽快感を得られる好ルートだった。

8月10日　快晴　BC⇔北岳

皆それぞれ体調が悪い中、Cガリー大滝に取り付く。そして四尾根に向い、すぐにマッチ箱のピークにつく。

8月11日　快晴　BC⇔北岳

C沢の最も左から上がる。念願のピラミッドフェースに取り付く。いやらしい所もあったが無難に終了する。

8月12日　快晴　BC→広河原下山

4．南アルプス甲斐駒ケ岳～茶臼岳

期日　8月30日～9月7日

メンバー　L田端、平井

8月30日　曇～雨　竹宇駒ケ岳神社→黒戸尾根七合目

ほとんど風がなく、湿度が高い。道のりは富士山の吉

田口登山道のようである。

8月31日　　晴　CS→仙丈岳藪カール

駒ケ岳の登りは梯子が連続し、慎重に行動する。天候に恵まれ、パノラマを楽しむ。

9月1日　　晴〜雨　CS→熊ノ平小屋

1年生の調子が悪いのでペースを落して進む。伊那荒倉岳手前の樹林帯は倒木があり難路であった。

9月2日　　雨　停滞

大雨で、しかも1年生が風邪ぎみだったので、休養の意味を兼ねて停滞とする。

9月3日　　雨　CS→三伏峠小屋

予備日が2日なので、早朝に出発して時間の短縮をしたい。あいにくの天気なので塩見小屋で休息をとる。塩見新道付近でルートを違えてしまう。結局、13時間の行動を強いられる。

9月4日　　曇〜晴　CS→高山露営地

どしゃ降りの日である。ラジオで明日に寒冷前線が通過すると聞く。にわかに今後の事を考え、少しでも進むことにする。昼には天気が回復してきた。

9月5日　　晴〜雨　CS→百間洞山ノ家

井戸川、頭のトラバースをぬけ、やがて荒川三山の稜線にむけて直登をする。登っても登っても高山裏避難小屋の姿が消えない。赤石岳を終る頃には霧が出てくる。

9月6日　　雨　CS→茶臼小屋

聖岳への鞍部を下った。この最低部の所で聖岳を見上げると、厳しそうな岩稜が迫ってきた。そこからは疑似ピークが多く、ダラダラした山域であった。

9月7日　　晴　CS→畑薙第一ダム下山

最終日は天気に恵まれ、快調に下山した。計画の達成を共に祝い、疲れをいやす。

5．南会津　檜枝岐川下ノ沢遡行

期日　9月1日〜4日

メンバー　L渡辺、家口、野本、田山

9月1日　　曇　檜枝岐→下ノ沢出合

田山の遅刻で予定した汽車に乗れなかった。しかし、予定通り目的地に着く。

9月22日　　曇　CS→第三ゴルジュ出口

2段、20m、30mの竜門ノ滝はすごい。あまり人の入らない沢らしく巻道もない。遡行図と地図を頼りに進むが、距離感を違えて苦労する。また滝の登りの連続で時間がかかり、あたりが暗くなり、竹ヤブの少し斜面になっている所でテントを張った。

9月3日　　雨　停滞

9月4日　　雨　CS→駒ケ岳→檜枝岐下山

雨は小降りになった。ヤブをこぎ、前一面に草原が広がった。また雨が強くなり小屋に入る。縦走を断念し、下山する。

＜合宿を振り返って＞

今年こそは事故の無いようにしようと思い、入山した夏山合宿であった。去年と同じ三本歯を通るにあたっては相当な注意を払った。その甲斐あってか大きな事故もなく終了することができた。しかし、ゴルジュ内において2年生の滑落が多かった。何度通過するにしても大事故につながる可能性のあるところは気が抜けないということを、わかっていただろうか。自分としても、危険の存在するところへ敢えて行く合宿の意味を改めて問いかけられた気がした。

雪訓に関して言えば、上級生特訓に関して不満が残った。自分の身を守るのだと思わなければ今後何度やっても気の抜けたものになってしまうだろう。また、1年生はカール底に行くまででバテてしまってはお話しにならない。体力増強が今後の課題だ。

前年行なえなかった立山東面の登攀は満足と共に楽しく行なえたと思う。下級生の感想の中にも良かったとの意見が多かった。ただ難を言うなら、2年がリーダーをとったパーティーは、技術不足からか、予定通りの時間を守れなかった事だ。他の場合もいえる事だが、これは自分たちのレベルを正確に評価出来ないことからくるおごりではないかと心配になる。

BCの生活に関して言えば、締める人間がいないとこれほどいい加減になるのかという気がする程である。私1人で全てをチェック出来る訳も無く、なあなあですむ雰囲気ができてからでは遅すぎる。中津留がいない今こそ議論されるべき内容であろう。更に、今回意図したこととして、リーダー部員の養成という問題があった。もう、私の影響下から脱した活動が必要なときである。後半分散においてそれは多少発揮されたのだが、今後のことを思うと事態は急を要する。

とにかく全体的に見てみると、今回の合宿は無難にまとめてはあるが、きちっとしたところのない印象を受ける。本来なら、目的がはっきりしているのならこのようなことはないはずなのだが……。どうなのだろう。

（菊谷・記）

■秋山山行

―― 八ケ岳南部・赤岳鉱泉定着 ――

期日　11月２日～６日

メンバー　Ｌ山本、渡辺、勝又、野本、家口、田端、平井、伊藤、星野、ＯＢ岡田

11月２日　　雨～晴

①美濃戸口→赤岳鉱泉ＢＣ　Ｌ山本、渡辺、星野

５日間、のべ38人分の装備と食糧の重荷に喘ぎながら予定通りＢＣに着く。

②阿弥陀岳南稜取付→美濃戸口→ＢＣ　Ｌ野本、家口、勝又、平井

４時に起きるが、雨が降っているので待機。６時になっても変わらないので出発する。しかし、この様子だと南稜は危険だろうと思い、撤退を決意する。その後は、美濃戸から再入山する。

11月３日　　晴

①中山尾根登攀　Ｌ山本、勝又

岩壁には全く雪は付いていないが、練習なので毛手とアイゼンを着けて行く。雪が無いとひどく単調だ。コースタイムの半分の時間で終ってしまった。

②小同心クラック登攀　Ｌ渡辺、野本、家口

小同心の基部へのトラバースに手間取り時間をロスしてしまったが、３人で１ピッチずつトップを担当し、充実した楽しい登攀が行えた。

③大同心稜　Ｌ田端、伊藤、星野、平井

今日、美濃戸から入山した田端、伊藤と星野、平井はＢＣで合流して大同心稜を登る。しかし、大同心の基部から先の崩壊が激しいので、そこで引き返す事にする。

11月４日　　曇

①小同心クラック登攀　Ｌ山本、勝又、田端

雪が無いので岩が脆く落石が多い。１回ずつトップをやり、満足して終える。硫黄岳を通ってＢＣへ戻る。

②赤岳→横岳→硫黄岳→ＢＣ　Ｌ渡辺、野本、家口、伊藤、星野、平井

１年生のアイゼン訓練のつもりだったが殆んど雪が無く、なんとか赤岳の登りと下りで使うことができただけであった。あとはのんびりとした稜線歩きとなった。昼前に岡田ＯＢがＢＣまで上がって来られた。

11月５日　　晴～曇

①石尊稜→赤岳→キレット小屋　Ｌ山本、勝又、平井

横岳西壁は連日の晴天で雪は消え、夏と同じ状態だ。取付からひどく脆い砂岩で苦労する。ガイドブックでの300mの雪稜は脆い岩稜とハイマツ帯で、かなり時間を費やす。結局、６時間17ピッチにおよぶ登攀であった。

②阿弥陀岳北稜→阿弥陀岳→行者小屋→美濃戸口下山

Ｌ渡辺、田端、伊藤、星野、ＯＢ岡田

ＢＣを撤収して行者小屋に向う。中岳のコルへの道の途中からジャンクションピークにトラバースする。雪が無く上部の岩峰以外は面白味に欠けた。行者小屋にデポした荷を回収し、ちんどん屋のようなザックで下山した。

11月６日　　晴　キレット小屋→小淵沢駅下山　Ｌ山本、勝又、平井

昨日の疲労度と今日の所要時間を考えて、少し出発を遅らせる。後は走るように下っていった。

■富士山合宿

―― 富士吉田口五合目定着 ――

期日　11月21日～20日

メンバー　Ｌ菊谷、中津留、渡辺、下村、田端、野本、家口、勝又、山本、伊藤、田山、平井、ＯＢ岡田、山本（修）

11月21日　　晴　中ノ茶屋→五合目ＢＣ

前日１泊した中の茶屋から元気よく出発したが、途中からばてる者、ふらふらする者、下痢する者などいて、全員本調子とは言えない。早く着いたので、元気のある者で偵察を兼ねて七合目まで往復する。この時渡辺は無理したらしく、発熱後、ダウン。

11月22日　　晴　氷雪訓練

まだ周りにテントがなく、雪訓場所の確保に苦労する事無く太子館の横を取ることができた。鳥居館より先から風が強くなり、強風のなかで急いでアイゼンを付ける。直登直下降を終えた後、確保しながらジッヘルを行なう。夜になって渡辺の熱が高くなり、一晩小屋に泊める。

11月23日　　晴　ＢＣ⇔八合目（事故発生）

昨日と同じ場所に行き、ザイルワークを行なう。しかし、落ち役であった１年の平井が、前日作ったバケツでバウンドし右足首を骨折する。比較的早い時間だったため、自力搬出で五合目まで降ろすこととする。途中から岡田ＯＢと山本ＯＢが登ってこれらたので、車で東京まで運ぶこととなる。菊谷、渡辺も同行する。

11月24日　　晴　ＢＣ→下山

登頂をやめ中津留がリーダーで下山する。荷物が多く苦労するが、早いペースでおりた。

＜富士山合宿を終えて＞

起こしてはならない事故を起こしてしまった、という苦い思いが残った。安全に対して万全の用意をするべき

▶冬山合宿 剣岳頂上

訓練途中の事故であるし、山登りを始めたばかりの１年生の事故である。計画段階の検討不足、上級生の注意力不足など様々な反省がでてきた。この事故の教訓を生かしてリーダー会の建て直しが図られた。また、訓練の域を越えた、危険の考えられるような登山について改めて考えさせられるものであった。（菊谷・記）

■冬山合宿

―― 剣岳早月尾根 ――

期日　12月20日～12月25日

メンバー　Ｌ菊谷、下村、田端、野本、家口、勝又、山本、伊藤、田山

当初の計画では剱の小窓尾根やチンネ等の案も出ており、検討を重ねたが、富士山の事故と中津留の不参加などから、自分たちの実力を考え、計画がどんどん縮小していった。それでも冬期の剱という魅力のあるエリアから計画を移す事無く早月尾根を選ぶことになった。

計画を進めていく中で、他大学も同ルートに多く入っていることがわかってきて、しかも、雪が積もる前ということで余力を残しそうだという予想がたってきた。そのため、ルート工作とラッセルには力を入れようと話し合った。

結果的には実働日を２日残しての下山という異例の冬山となった。正月過ぎには大雪で数々の遭難事故があったというのに、我々は連日の晴天であっけなく終ってしまった。

唯一の救いは、アタック日に厳しい行動で今までの技術を発揮できたことだけであった。

12月20日　　晴　上市→馬場島～ 1,430m

前夜21時発の急行能登で雪のない富山に着く。タクシーが伊折の先の小又橋まで入るため、１ピッチで馬場島まで行ってしまう。馬場島の派出所で「ヤマタン」を借りる。前日降った雪が積っているが、その前に入山した明大と農大によってラッセルの跡がうっすら残っている。途中田山のキスリングが壊れたりして苦しそうであった。雪がないのは楽である。

12月21日　　晴　ＣＳ→伝蔵小屋

２日目にして早くも伝蔵小屋に着いてしまった。３ピッチ目には荷上げをしている明大のパーティとすれ違う。伝蔵小屋の横を整地しテントをはる。

12月22日　　晴　ＣＳ→ 2,450mＡＣ

伝蔵小屋から２ピッチで 2,450mのＡＣに着く。同じところに農大と山岳警備隊がテントを張っている。彼らはすでにルート整備を始めているため、我々も幕営してから後を追って出発する。 2,600mで50mほどフィックスしてから 2,614mは左を巻くルートをとる。 2,650m付近で２ピッチフィックスした後、低圧部の通過に伴う風を考え引き返すこととした。

12月23日　　晴　ＡＣ⇔ルート工作

夜が明けるのを待ってルート工作に行く。獅子頭で夏道のトラバースのルートをとり、２年生にフィックスを行なわせる。雪は安定しておりそれほどの難しさはなかったが、鎖場は切れ落ちていて恐いところがあった。最後のクーロワールを偵察してから、ＡＣに戻る。

12月24日　　曇〜雪　ＡＣ⇔剣

昨日までの好天から打って変わって剱らしい悪天となった。フィックス通過をスムーズに行なうためにパーティーを２つに分けたが、相互の連絡がうまく行かず、時間を食った。獅子頭を通過中に風が強くなり、カニのハサミのスタカット２ピッチは辛いものであった。頂上は展望もなく、ツェルトにすぐくるまってしまった。下山ではかなり風が強く、１年の通過に気を使った。この合宿唯一の厳しい１日であった。

12月25日　　晴〜曇　ＡＣ→上市下山

予定では馬場島に泊まる予定であったが、馬場島までタクシーが入るため富山まで下山する。下りで何度もキスリングの壊れた田山は可哀相であった。

■春山合宿

―― ヒマラヤ クーンブ山域・北海道中央高地 ――

１．アイランドピーク及びクーンブトレッキング

期　　日　２月18日〜４月４日

メンバー　Ｌ菊谷、野本、田端、家口

２．北海道中央高地

期　　日　３月21日〜３月30日

メンバー　Ｌ山本、渡辺、勝又、下村、伊藤、田山

＜計画に当たって＞

いよいよ年間最後の目標である春山合宿となった。目標は新しい山岳部の創造である。

今年は北海道とヒマラヤの２つにパーティーを分けることとした。どちらの計画も違った困難が予想されるだろう。ヒマラヤの方は海外が初めてのものばかりということで、高度順化には気を使った。文献を読み、経験者に聞いてきた。計画もゆっくりとしたものにした。現地では山登りの原点に立ち帰った楽しみを見出していこうと思っている。しかし、無事故に帰ってくることこそが我々の義務であることを、忘れてはならない。それは確実に次の世代の山岳部につながってゆくものであろう。北海道もそれは同じく、地域の特殊性を踏まえた上でのより行動的な登山につながっていくことを期待する。また、新しくリーダーとなるための自信をつける山行でもあってほしいと思う。

この２つを合宿の一環として考えることは、合宿に新しい可能性を開いていくことであろう。　（菊谷・記）

１．アイランドピーク登頂、クーンブ山域トレッキング

３月１日　　曇り　ルクラ→パグディン

待つこと６日。ついにルクラへ飛行機が飛んだ。メンルンツェを横目に大揺れに揺れてルクラの坂道飛行場に降りたった。ルクラでＴＨＴに頼まれた荷物が何者かに盗まれる等の事件があったが、酸素のシリンダーを手に入れた後、ヤクに荷物を積み、トレッキング出発。明治の大川君と明学の山本君のＩＣＣの二人と一緒の登山隊のように出発し、無事パグディンに到着する。

３月２日　　曇り　パグディン→ナムチェ 3,440m

朝、雨対策をもう一度万全にし、１時間くらいかかる朝食を終え、先に出発したヤクを追っかける。前日は雨

▲春山合宿 正面にアイランドピークを望む

が降っていたが、道はしっかりしている。上高地から横尾のような道だ。二度ほど吊橋を渡り、レンジョで昼食を食べる。そこからナムチェまでずっと登りである。ナムチェでは村長さんの経営するロッジで世話になる。

3月3日　　晴れ　ナムチェ滞在

今日一日で買い出しと高度順化を行なう。酸素のシリンダーを購入し、装備を揃えた後に、エベレストビューホテルへ順化行動に行く。途中博物館によった後、雪の残るドロドロの道を登る。道を間違えて手前の丘を登ってしまうことなどあったが、素晴らしい展望が望めた。夜は順化行動の影響からか、頭痛を訴えるものもいる。後から高度の影響がでるというのは本当であった。

3月4日　　晴れ　ナムチェ→タンボチェ 3,860m

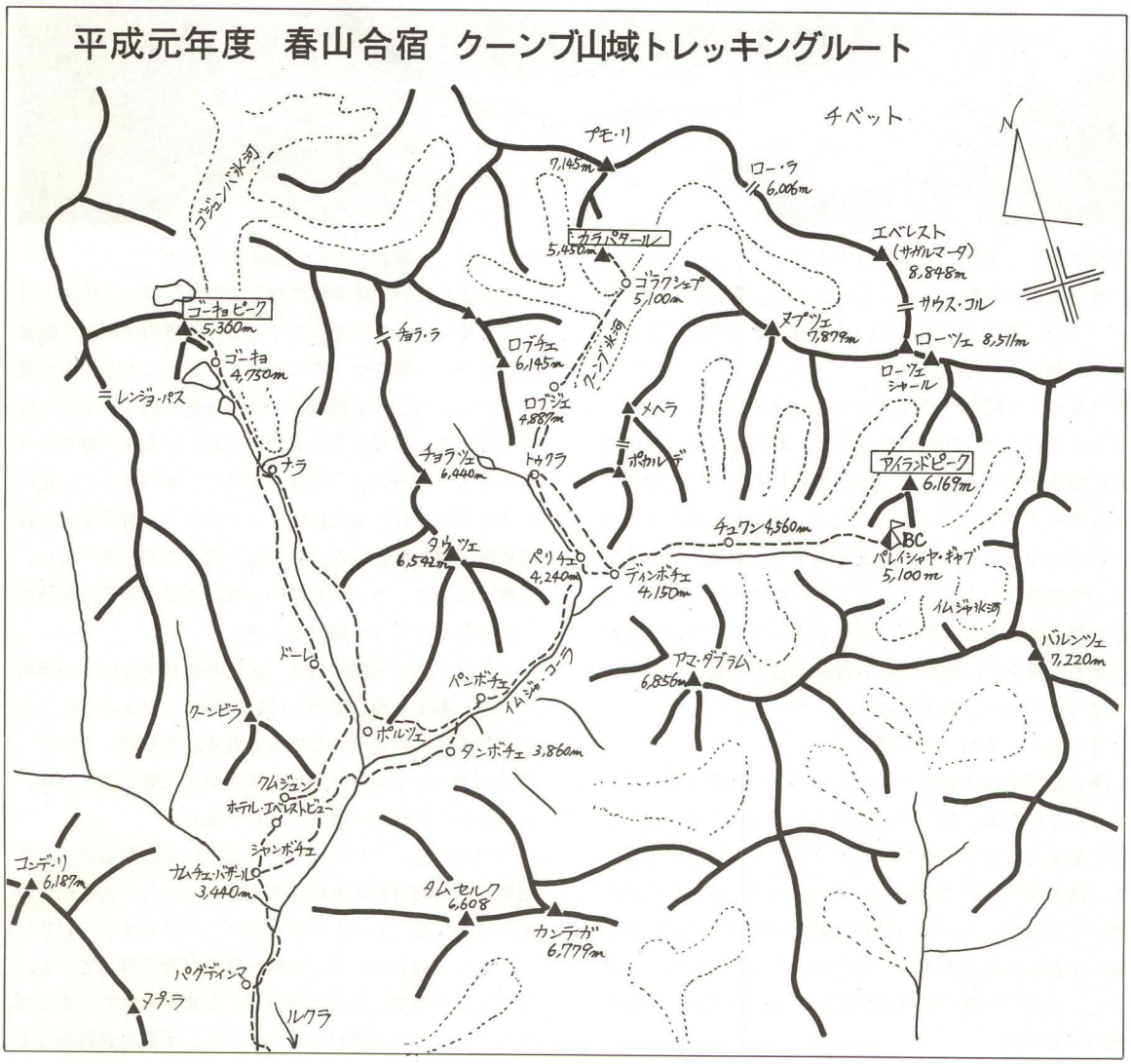
エベレストビューのあるクムデの丘を巻き、穏やかな景色を楽しみながら歩く。昼食を食べたプンキからは急な登りで息がきれる。タンボチェの寺院は焼けてしまったそうだが、加藤保男氏らの碑は立派に残っていた。

3月5日　　晴れ　タンボチェ→ディンボチェ 4,150m

まだ雪の残るところが多く時々滑る。マニ石の列の左側を通ってしばらく行くとイエティの頭皮と手の皮があるというパンボチェの寺院に着く。そこで昼の休憩をとった後、右にアマダブラムを見ながら歩き始める。二股の川の橋を渡って平らな所に出ると、プモリやロブジェが見え始める。早く着いたためディンボチェの裏の丘を登って順化する。

3月6日　　晴れ～曇り　ディンボチェ滞在

今日は、順応日ということでポカルデの東の丘に登った。5,280mの丘でさすがに疲れる。150mほど登ったところで田端が頭痛を訴えたので降ろさせる。頂上からポカルデまではとても遠く見えた。



3月7日　　晴れ　ディンボチェ→チュクン 4,560m

今日の行程は短く、ゆっくりできた。菊谷、家口はローツェ南壁下部 100mくらいを登る。チュクンはアマダブラムがよく見える。

3月8日　　晴れ　チュクン→BC 5,016m

今日でBC(5,016m) に入った。本当なら 5,100m付近に張る予定であったが、水が得られぬとのことでBCの位置を下げてしまった。また、ここで食天を作るための石が少ないため、ゴアツェルト1つを食糧テントとし、1つを器具テントとする。サーダーは我々と一緒のテントで寝ることとなり狭くなってしまった。ヤクは5日後に来る約束をし、降りていった。今日の行動も長いものではなかったが、非常に疲れる。

3月9日　　晴れ　荷上げ

今日の予定は休養日であったが、BC整理は特にすることもないため、荷上げをすることにした。本来のBCの位置までは平坦な道である。そのパレシャヤギャブからは踏み跡づたいに登っていく。あわよくばACまでと考えていたが、 5,400m付近で見上げたルンゼに恐れをなして左側にあるキャンプの跡地に荷物をデポしてしまった。15分に一度の割合で休んでいる。夕方から雪がチラついていた。

3月10日　　晴れ　AC(5,800m) 往復

昨日よりだいぶ体が楽になっている。特に2年3人は順化うまくいっているようである。前日のデポ地で酸素のシリンダー等をザックにつめこみ、ルンゼの内側を登っていく。ちょうど屏風の1ルンゼをつめているような感じである。上部までつめてから右側に大きく見えるリッジをトラバースぎみに登って行く。そのリッジの先にもう一本のこぎり状の狭いリッジがあり、直上するとⅣ級程度の難しさとなる。我々は一度そこでいきづまり、右側の広いルンゼに降りていった。この辺からは5分に一度休むかのような感じである。

ACは 5,800m程の所で、氷河の取り付きの少し手前である。あまり良い場所とはいえない。ツェルトにくるんで装備と食糧をデポして引き返す。下る時に水のない場所にテントを張ったイギリス人が多人数で来ていた。

3月11日　　晴れ～曇り　BC→AC

前日よりも、より楽になってきている。朝もゆっくり出発したため行動にも余裕がある。しかし、ACについてみると大変であった。昨日デポしたツェルトがビリビリになって破れており、食料・装備が散らばっている。カラスの仕業で、食料の半分以上が食べられてしまった。なんとか一日分の食料は集まったが、予備の食料がなく

▲ACより急な雪壁をトラバースする

なってしまった。

ACは狭い棚のところで、板状の岩を敷きつめてテントを張れるように整地する。次にテントを張るときになって、内張りが小さいのに気がつく。この大きなミスに呆然とする。なんとか誤魔化して内張りを張った後、家口と菊谷でクレバス帯を偵察する。小さなクレバスはあるがなんとかフィックスを張らなくとも大丈夫のようだった。途中でICCの二人に会い、ルートの様子を教えてもらう。その夜は寒く眠れぬ夜を過ごす。しかし夕焼けに浮かぶマカルーは素晴らしかった。

3月12日　　雪　アイランドピーク登頂

朝起きてみると雪が5㎝ほど積もっており、最悪のコンディションである。しかし、この場所にもう1日とどまるには、調子が悪くなりそうであるし、食料もない。5時半には起きていたが、しばらく晴れるのを待って7:50出発する。田端以外はあまり調子がよくない。最初のリッジ状の岩壁でのトラバースの危険を考え、ACからアイゼンをつけザイルを結びあう。ザイルオーダーは野本・菊谷パーティーと、田端・家口パーティーである。リッジ状の岩壁はスタカットで抜け、そのままタイトロープで氷河の通過を行なう。最初に40㎝ほどのクレバスが出てくるがピッケルを対岸につくことで跨ぐことができる。次に斜面をトラバースし、もう一度クレバスを跨いで、ブリッジ状になったところを確保しながら通過する。そこから広い雪原にでたところで1本休む。その頃から晴れ間が時々見えるが、雲の動きがとても早くなる。雪壁の取り付きには深いクレバスが横たわり、唯一通過可能なボコボコと盛り上がった氷を登る。5mほどの氷を登った後に、ルンゼ内を田端トップで登っていく。稜線までは全部で4ピッチ 150mほどで、下部2ピッチは菊谷・野本でフィックスする。上部1ピッチは急な斜面で、田端・家口が登り切った後、風が強くなり雪煙が上がり視界が悪くなる。待っている間ずいぶん寒い思いをしていた。稜線からは軟らかい雪質のナイフリッジで、ピッケルを突き刺しながら慎重に進む。

頂上は広い稜線でローツェ南壁などまったく見えない。あそこが頂上だなどと何度かだまされた後突然広い所に出て 12:30頂上についた。頂上でひとしきり感動しまくった後、部旗を取り出して写真を取る。20分ほどで頂上から下り始めるが、南西から吹く強風のため緊張を解けない。ルンゼを下るときにはスノーバーをだし、最後に菊谷が下る。後向きにダブルアックスのような形になるためひどく緊張する。フィックスロープの位置までくると安心であるが、回収に手間取ってしようがない。そのため、田端・家口は先行させ、ACの撤収をさせることとする。菊谷・野本でフィックスの回収を行なうが、アイスピトンなどの回収が時間を食い、寒さのため体力も消耗する。ACの跡に着いたときには菊谷が呼吸困難であったので酸素を使用することとする。酸素を吸ってか

◀アイランドピーク頂上

らはとたんに回復し、下山に問題はなかった。荷物も重く疲れているため、ゆっくり自分たちのペースで下りる。暗くなってしまったが、 18:45全員ＢＣに着いたときはほっとしたとともに深い満足感があった。その夜はサーダーの作ってくれた飯を食べぐっすり眠る。

３月13日　　晴れ　ＢＣ→ディンボチェ

今日はゆっくり休養と思っていたが、 14:00に来るはずのヤクが 11:30には参上。急いでＢＣをたたみ、出発する。チュクンでサーダーとヤクを待った後、ディンボチェへ向かう。

３月14日　　晴れ　ディンボチェ→ロブチェ

ペリチェの上の広い台地を通ってロブチェへ向かう。左手にはタウチェとチョラチェが大きく見える。途中でヤクが死にそうになってしまい、大変であった。

３月15日　　晴れ　ロブチェ→ゴラクシェップ

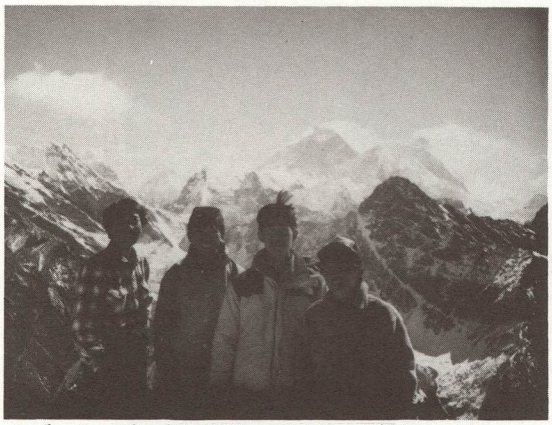
今日カラパタール登頂の予定であったが、疲れていたので明日登頂することにした。そのため、食料などの残りを村の人に売ることになった。あまり高く売れずにがっかりする。

３月16日　　晴れ　カラパタール登頂→パンボチェ

ゴラクシェップＡＭ5:55出発、久しぶりの早起き行動で頭がパッとしない。しかも朝食前の登頂ということで腹が減ってしようがない。非常に冷える中をしばらく歩いていくと、突然まわりが明るくなり、エベレストとヌプツェの間から朝日がさしてきた。カラパタールとはいえ 5,450m。さすがに多くの人が訪れるだけはあって、エベレストこそ逆光であったがプモリは最高だった。

３月17日　　晴れ　パンボチェ→ナラ

昨夜泊まったパンボチェのバッティはよかった。新しい小屋であって眠りも深かったようだ。今日からはヤクと別れ、サーダーのみとゴーキョ行きである。ポルツェまでは陽のあたる、川の右岸を巻いていく。今日の宿泊地ナラでは、我々はヤクの寝床で寝ることになった。



▲ゴーキョピークにてチョモランマを望む

３月18日　　晴れ　ナラ→ゴーキョ

今日で日本をたってから１ヵ月となる。朝はゆっくりと出発した。左に氷河湖を見ながらのんびり自分たちのペースで歩く。沢筋を抜けると２つの湖が現われ、絶景のコースである。ゴーキョは案外広い村である。

３月19日　　晴れ　ゴーキョピーク登頂→ドーレ

5,480mゴーキョ登らずしてゴーキョ語れずである。最高の景色でびっくりする。チョー・オユー、ギャチュンカン、ゴジュンバカン、チョモランマ、ゴジュンバ氷河と有名どころが目白押しである。菊谷とサーダーは咳がひどく消耗している。下りは早かったが、ゴーキョでついついのんびりしてしまった。ゴーキョからドーレへの道は、雪が解けてドロドロである。菊谷は登りではひどくつらい状態である。

３月20日　　晴れ　ドーレ→ナムチェ

懐かしのアン・プルバ村長の宿に到着。もうすでに雪が解けている。ドーレからの道は対岸から見たように急な登りが出てきて菊谷は遅れ気味である。峠で休んで、クムジュンにむかう。クムジュンからはエベレストビューに向かい、そこで昼飯休憩をとる。

３月21日　晴れ　ナムチェ休養

今日は一日休養として、装備を売ったり、両替をしたりで過ごす。久しぶりのシャワーを浴びたり、うまいものを食べたりして疲れをいやすことができた。

３月22日　　曇り～雨　ナムチェ→ルクラ

ナムチェをたち、ついにルクラに着く。その瞬間から急に雨が降ってくる。夕方には明日の欠航が決まる。

３月23日　　雨　ルクラ滞在

今日はチェスやトランプをやって長い一日を過ごす。

３月24日　　曇り　ルクラ滞在

朝起きてみると窓の外は雪景色である。昨晩は雷まで鳴っていた。不貞腐れて寝ようとすると、サーダーが今日は飛ぶかもしれないと言う。準備して待っていると、山と山との谷間からツインオッターが見え始める。しかし、１番機乗客を乗せて飛びたった後、２番機は我々の前に姿を見せることはなかった。その後は全員お茶を飲んで食うだけの無気力人間と化してしまった。

３月25日　　晴れ　ルクラ→カトマンズ

朝７時に飯を食って、急いで出発の準備をする。9:30頃には飛行機も現われ、全員の拍手とともに長いルクラ生活に終止符を打った。と同時にトレッキングの終了に深い満足を得た。帰りはサーダーの故郷の真上を通る。

一月足らずの間に、 6,169mのアイランドピークと、

5,450mのカラパタールと、 5,480mのゴーキョピークに登ってきたわけだが、この経験が次なる山へとつながっていくと良いと思う。

トレッキング外行動表

<前　半>

2月18日　成田→バンコク

2月19日　バンコク→カトマンズ

2月20日　ＴＨＴに打ち合わせに行く。シェルパとミーティング。換金。レストラン富士にて宮原ＯＢと会食。

2月21日　ＴＨＴにて支払い。装備買い出し。薬書購入。村口ＯＢと会食。

2月22日　レーション及び装備買い出し。薬書書き。パッキング。

2月23日　明日のフライト中止決定。

2月24日　フライト待ち

2月25日　〃

2月26日　〃

2月27日　〃

2月28日　〃

3月1日　カトマンズ→ルクラ→パグディン

<後　半>

3月25日　ルクラ→カトマンズ　インターナショナルＧＨへ。古野ＯＢ、松井ＯＢ、渡辺ＯＢに会う。

3月26日　全員で土産物を買う。ウォンチュの家で焼鳥パーティ。

3月27日　バスでポカラへ行く。

3月28日　ポカラ観光。

3月29日　バスでカトマンズへ戻る。

3月30日　レストラン富士で宮原ＯＢと会食。

3月31日　荷物のパッキング。

4月1日　カトマンズ→バンコク。

4月2日　バスでパタヤへ。

4月3日　パタヤ海岸で海水浴。

4月4日　バンコク→東京。

<出発まで>

4月12日　第一回ヒマラヤ登山委員会発足

この最初の会合で、これまで、ＯＢ山本、中津留、菊谷で話し合っていたヒマラヤ登山の実現に向けて、具体的に動き始めることにした。参加は基本的に全員ということにし、海外登山に向けて積立貯金を始めた。会の目的を「学生主体で海外登山を望む会」と決め、時期は1年生の指導に一息つく春休みということに決め、場所はネパールヒマラヤと定めた。

5月25日　第二回ヒマラヤ登山委員会

ネパールの山の中から、ランタン山群のランシサ・リ（6,427m）を最初の候補にあげ、仮計画書を作る。しかし、ルンゼの通過における雪崩の危険性が多く、学生らしい登山として適当でないということと、登山許可所得がぎりぎりであったため、ライトエクスペディションの中から考えてみることにする。

8月15日　第三回ヒマラヤ登山委員会

この時点で、パルチャモ、ロブジェ、クワンデ等の候補があがった。選択の基準は、①全員登頂の可能性があること、② 6,000m以上の高度、③適度の技術的困難さ、④景観、⑤アプローチ、とした。また、実際にヒマラヤに行ける、行きたいというメンバーが絞られてきた。全員で行くことはできなくなったが、国内の登山も並行して進めていくこと、お互いに協力することを決めた。

10月21日・22日　富士山高度順化登山

参加するメンバー全員で行なった山行であった。

10月28日　第四回ヒマラヤ登山委員会

最終的に4人のメンバーが決まった。ＯＢの協力をあてにする形でロブジェの計画を具体化し、細かいところまでつめていった。結局はＯＢの参加は望めず、縮小を余儀なくされたが、この時期に考えたことが後にずいぶん役に立った。高山病について、山の概念について学習会を繰り返し、意識を高めていった。また、トレーニングとして、普段の山行の他に、走り込みと、富士山登山にウエートを置いた。

11月16日・28日　第五回ヒマラヤ登山委員会

過去の写真などを元にしトレッキングルートなどについて検討していった。そしてこの後からミーティングを増やし、ＯＢにも積極的に話を聞くことができるように

▲富士山順化トレーニング

なった。そして、アイランドピーク登山検討会として、食料担当家口、装備担当野本、渉外担当田端、高山病・予算担当菊谷で進めていった。部会の後、トレーニングの後と何度も会って検討した。

1月17日　健康診断

1月23日　アイランドピーク登山検討会

2月5日　酸素取り扱い説明会

2月8日　壮行会

2月9日～11日　富士山高度順化

2月8日・13日　肝炎予防接種

2．北海道中央高地

3月21日　　曇～晴　白金温泉→美瑛富士避難小屋

前日は青森から丸1日かけて白金温泉キャンプ場に着いた。美瑛川沿いの林道をスキーをつけて歩き、美瑛富士への登山道から取り付く。雲が低く垂れ込め、美瑛富士は全く見えないが、一直線にひらけたなだらかな樹林帯の中を黙々と歩く。急な斜面をやぶこぎして、はっきりしない尾根上に出る。このころから天気が良くなり、視界が開けるが、北海道とは思えない暑さに全員汗びっしょりの登りになる。目の前に迫る美瑛富士に向かってまっすぐ進み、中腹から左へ大きく回り込むようにトラバースする。予想に反して小屋の位置が奥であったため到着が遅れてしまった。小屋は入口付近が埋まっていたが掘り出して使用した。

3月22日　　雪　停滞

5時半に朝食を取り、出発の準備をするが、外は風が強く、ホワイトアウトの状態なので待機とする。9時に天気図をとるが、どうも気圧の谷の通過中らしい。10時になっても良くならないので停滞を決定する。

3月23日　　晴～曇　CS→ 1,569mと 1,668mのコル

雪面が堅いのでアイゼンを着けて出発。石垣山からベベツ岳へはスキーを履くが、いまいちスキーの有効性に疑問が残る所だった。オプタテシケ山への登りはアイゼンが良く効きスピードが上がる。少々悪いリッジを越え、だだっ広い斜面を1時間かけて下る。遙か遠くの雪原でスノーモービルが走り回っているのが見える。昼過ぎから天気が悪化する。

3月24日　　雪　CS→ツリガネ山の先のコル

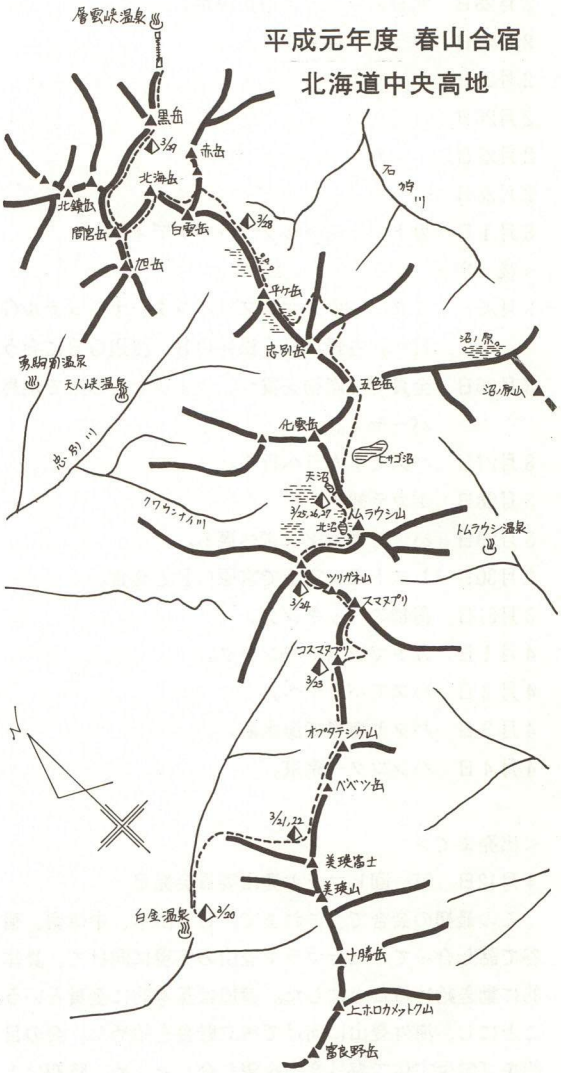
少し強めの風と共に雪が降っているが、視界はいくらかあるのでコンパス片手に出発。しっかりとコンパスを見ていたつもりだったが、コスマヌプリの頂上から違う尾根を下ってしまう。かなり下ってから気付き、トラバースしてもとの稜線のコルに戻る。次のピークはアイゼンを着けて越す。ツリガネ山からは視界が良くなったので、緩い斜面をのんびりスキー滑降。下り切った、だだっ広いコルで幕営する。

3月25日　　晴～曇時々雪　CS→天沼

スキーを履いて出発するが三川台への登りがきつく、アイゼンを着ける。三川台の上でスキーを履くが、トムラウシ山の手前の急な斜面でもまたアイゼンを着ける。トムラウシ山は登らずにトラバースして先を急ぐが、ガスのため、コンパス片手に慎重に進まざるを得ない。下りで再度アイゼンを着ける。天沼とおぼしきところで本格的にガスってきたので行動を打ち切る。スキーとアイゼンの脱着が7回もあり、視界の悪さもあって、距離が稼げず、もどかしい1日だった。

3月26日　　雪　停滞

西高東低が決まり、昨日の夕方から強烈な北西風の猛



吹雪。いつも通りの時間に朝食をとったが10時に停滞を決定する。

3月27日　　雪　停滞

昨日に比べて視界は良いものの、風も強く、行動すれば凍傷患者が出ることは明らかなので11時に停滞を決定する。昼過ぎから日が差すようになり、気分的にも随分明るくなったのでトランプをして過ごした。

3月28日　　晴　ＣＳ→白雲岳避難小屋

念願の青空になる。いつもより１時間早く出発する。ＣＳの地図上の位置を間違えていたために、稜線からはるかに東にずれたピークに立ってしまう。しかし、開き直って、そこから見える五色岳へ一直線に進むことにする。アイゼンを着けてそのピークからヒサゴ沼に下り、あとはスキーを履いてひたすら歩くのみ。五色岳の頂上からのんびり滑降し、忠別岳は中腹から右へ大きく巻き、忠別沼へ下る。平ヶ岳はめまいがしそうなほど大きく平坦な山だ。正面の白雲岳が全然近くならない。全員汗だくで黙々と歩く。平ヶ岳を越した所からは地面が剥き出しになっているので30分程スキーを担いで歩く。スキーを履き直して30分程で白雲岳避難小屋に着く。今日のようにスキーを有効に使うことができるとスピードが上がり気持ちがいい。

3月29日　　晴　ＣＳ→黒岳石室

白雲岳と小泉岳のコルまでスキーで登る。稜線上は強風で視界が効かないのでアイゼンを着け、稜線どおしに歩く。スキーを担いだまま間宮岳まで行き、頂上に荷物をデポし、最小限の荷物を持って旭岳へ。１時間半程で頂上に着き、晴れ渡った空の下でいままでの行程を振り返り、満足してから記念写真を撮って戻る。再び重荷を背負い歩き始める。北鎮岳の肩から少し下った所からスキーを履く。やはりスキーは速く、あっさりと黒岳石室に着いてしまう。がんばれば今日中に層雲峡に着くことはできるが、予備日も余っているので、ここで幕営して食いつぶしをすることに決める。

3月30日　　快晴　ＣＳ→層雲峡下山

空には雲ひとつなく、絶好の下山日和。スキーを背負って出発。あっさり黒岳の頂上に着く。しばらくのんびりし、眼下のスキー場を目指して下る。かなり急な雪の斜面なので緊張して下り、なんとかリフトの終点に着く。まだリフトは動いていないので、全員好き好きに滑ることにする。

「ヒマラヤ山行を終えて」

菊谷　兼一朗

「ヒマラヤに行こう。」「海外で合宿をしよう。」そんな発想が声になってでたのは私が２年生の時であった。最初はＯＢの話を聞くだけであったが、２年間ある時間を有効に使うことによって自分達の体験談としてヒマラヤ登山ができるのではないかと考えるようになった。現役のうちにヒマラヤで登山を行う、それは考えるだけでも胸躍るものあった。

我々の世代は昔に比べると容易に海外に出ていける。それは事実だがその反面何が何でも外国に行けさえすればよい、というがつがつとした気持ちだけでは時代に乗り遅れているのだとも言える。しっかりしたモチベーションの認識した上での行動をしたいと思った。目的を持って海外に行くことが自分のためになるのだと信じて疑うことはなかった。最初は行きたいだけの気持ちでしかなかった。しかしはっきり行くんだと決めたのは山岳部の皆と行くことを決めた時であった。そして行くためにはどのようにすればいいのか考えはじめた。

最初にしなければいけなかったのは、クラブのことであった。まず、後輩が後輩らしく育ってくれなければならなかった。昔は、クラブに迷惑をかけないという誓約書をもって海外に行くこともあったと聞く。それが最終的にクラブの人間のためになるのなら考えもするが、リーダーがいなくなってしまうのは何ともまずかった。結局、やったことがやれることでしかなかったわけだが、例年行われている合宿を精一杯やっていった。海外に行くために特別にしたことなどなく、国内の登山を充実させただけであった。いま思えば、海外だけにしゃかりきにならず、日本の登山と同じに考えて計画したのはよかったようにも思っている。本当は全員で行きたいと思っていたヒマラヤであったが、どうすることが自分の登山につながっていくのか考えた結果であり、いまでは行く人間、行かない人間などと区別する必要はないと思う。国内の登山と同等の価値を見出せる人間であることが大切であるように思う。ただ、最終的には自分だけでも行くのだという気持ちをそれぞれが持っていないと簡単にあきらめてしまうものでもある。

実際には多くの妥協を繰り返した気持ちが残る。自分が満足できることは何か、何をしたくて行くのか考え続けた。アイランドピークはヒマラヤ登山の中ではもっとも危険率の低い山であると思っている。たぶん「頂」の

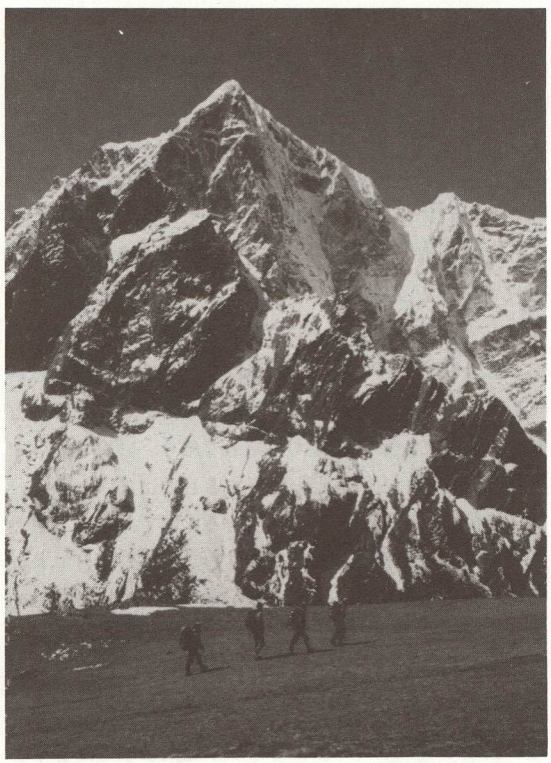
みを目指す登山であったなら行くこともなかったのではないだろうか。それでも行くのは「頂き」以外に何かがあると思っていたからに他ならない。道程が苦しければ苦しいほど達成感が深まるということは、裏返せば頂上に着かないことには達成感を得ることはできないということでもある。我々のような、ヒマラヤ、ましてや海外さえ初心者には「頂」だけでない「ふもと」を楽しむことで充分満足感を得られたと思っている。現地の人々の食習慣、生活、喜怒哀楽、人との交流など「ふもと」を楽しむ余裕があってよかった。

ともかく、これで自分の山岳部は終った。大きな事を成し遂げることはできなかったが、あとに残るものが何かを感じてくれればよかったと思う。私が先輩方から伝えられたことを後輩に伝えることはできただろうか。色々疑問や悩みも多かったがそれら全てをひっくるめても良い山行であった。

「タシディレー、ネパールは楽しい」

野本　修

僕は『ナマステー』より『タシディレー』の方が好きだ。タシディレーとはシェルパ語及びチベッタンの言葉で、意味はナマステと同じくおはよう、こんちわ、こんばんわ、さよなら、のすべての意があり、とても便利である。ネパールの人々の中でも、シェルパ族や、チベッタンはとても日本人と似たモンゴル系のため、親しみやすい。



▲チョラツェ

ネパールに行く前、僕が頭の中で描いていた景色は、もちろん白い山々、そしてヤクを連れ歩く人々など、山の麓の景色でしかなかった。バンコクから飛行機でカトマンズへ、窓から赤茶けた家が目に入り、あっと言う間に着いた。空港を出るやいなや、あやしいインド系の連中に囲まれ、勝手に僕達の荷物を持っていくではないか。あげくのはてには、「チップ、チップ」とおねだりをする。宮原ＯＢのＴＨＴのバスがお待ちかねで、そこに行くと、今度は御丁寧に車に荷物を積んでくれるではないか、まったくさっきの連中とは違って、さすがＴＨＴの社員だと思ったのは束の間、「チップ、チップ」と言ってきやがった。片目がないおじさんや、まだ７才ぐらいの子までもいた。なんとか振りきり、車に乗ると、クラクションを鳴らしながら暴走するではないか。うるさいくらいクラクションを鳴らすが、人々はあまり気にしていない。そして牛が道の真中で昼寝をしている。もう何が何だかわけがわからん、それでいてとても楽しい。これが僕のネパールに来た第一印象であり、日本で描いていたネパールとはまったく違ったものであった。ほっとできたのは、ホテルに着いてからだった。

ＴＨＴで僕らのサーダーを紹介してもらった。名前はウォンチュ・シェルパと言い、ソロクーンブ出身のシェルパ族である。彼は26才で、独身であり、14才の時からエクスペディションに加わり、キッチンボーイを経て、今ではサーダーとなった。エベレストには７回も行っているが、登頂はしていない。そんな彼と僕らはほとんど毎日、一緒にいることになった。ウォンチュは時々、'88年の三国友好チョモランマ登山隊の時のヤッケを着て歩く。ネパール人用の緑色で、ちょっときたないが、暑いのをがまんして着ている。帽子も遠征の時に作ったオリジナルなもの、そして、ザックにもワッペンを張り付け、自分は優れたシェルパということをアピールしているようだ。

僕は装備を担当し、ウォンチュと買い出しに出かけた。彼はこういった買い物に慣れているせいか、うまい具合に安く仕入れてくる。ナムチェバザールでは、バザールが終わる時に行くと安く買えると言い、ケロシンを半値で手に入れた。ほとんどの装備は日本でそろえて持ってきたので、ネパールに来てあたふたする所もなかった。さんざんフライトを待たされ、いよいよカトマンズを離

れ、白き神々の地に行くことができた。飛行機の中からは、ガウリサンカール、メンルンツェ、などが見え、白い山並みが近づいてくる。初めて見るヒマラヤの山々は感動しないはずがない。飛行機が降りるのはルクラ。ここはもう僕が想像していた通りの場所で、また違う国に来たかな、と思わせるほどであった。荷物はゾッキョという動物に持ってもらうことになった。ゾッキョという動物は、ヤクと牛をかけ合わせた動物で、ルクラからナムチェぐらいまでのあまり高くない所で力を出す動物である。しかし、ナムチェからも僕らの荷物持ちはゾッキョで、ロブジェという村の手前で高山病になってしまい、一命をとりとめるというハプニングもあった。このゾッキョ使いのペンバさんもシェルパ族で、うまく口笛を吹きながら歩かせていた。ペンバさんの弟さんが、アン・ツェリンという田部井淳子さんとエベレストに登った有名なシェルパであった。兄弟でこんなにも知名度が違うものかなと思った。そういえば、ＴＨＴでお世話になった、アン・ギャルツェンの兄さんも、ナムチェ村の村長で、アン・プルバであった。おかしなもんだ。

僕らが行ったエベレスト街道は、シェルパの故郷といえども、外国人がとても多く、英語又は日本語で会話ができる。彼らも必死で言葉を覚え、商売している。そこの所へ、ウォンチュから教わったシェルパ語で、タシディレーと言うと、彼らはビックリするわけで、とても珍しがられる。

楽しかったネパールでの日々を思い出すたびに、また行きたくなってしまう。ネパールには、何か魅力があるのではないでしょうか。ウォンチュは帰りの飛行場でカター（絹の織物）を渡してくれ、See You Again と言っていたのがいまでも忘れられない。

僕のヒマラヤトレッキング

田端　宏好

日大山岳部員としてはアイランドピーク登山を前面におし出すべきであろうが、飛行機に乗るのが初めてである田舎者としては、海外旅行、街での買物、そして、トレッキングがなんと言っても心の中にしみ込んでいる。

ネパールは工業資源に乏しく、ヒマラヤをベースにした観光によって外貨獲得をめざしているようである。

高度障害をひきずりながら、アイランドピーク登頂をはたし、いよいよトレッキングがはじまった。その中でもなんと言っても、カラパタールからの御来光。ゴーキョの 360度の景観などが素晴らしいものであった。そして、こんな光景の中でなぜか、自分でも神聖な気持ちにさせられた。

トレッキング中は、ただボーっと歩いているわけではなく、もちろん自分の位置や、地形のことも思ってはいたが、いきなり非日常的な、あまりに巨大な山々に囲まれていると、考え方も格好つけてみたり、哲学的（？）になってくる。

単純ではあるが、神様のことについて考えてしまった。そして、もう一つ「誇り」についても、あるでき事から考えさせられることになった。

トレッキング街道、特にクーンブ山域ではポーターの給料が高く、ヤク、ゾッキョが主体になっている。当然、自分たちも、ヤク、ゾッキョを利用することにした。細かく言えば、自分たちが使ったのはゾッキョである。ヤクと雌牛をかけ合わせたもので、高所ではあまり強くない。偶然と言ったらいいのか、雇っていたゾッキョが、高山病で倒れてしまったことでそのことは、はっきりわかった。

われわれのアイランドピーク登山隊についたサーダーはシェルパ族出身のウォンチュという若者だった。よく民族の誇りというものがある。このシェルパにも、ひしひしと感じるものがあった。しかし、剽軽な所や、すけべなところも多々あった。

トレッキング街道では、ゾッキョの行列がたくさん通っていた。トレッキング街道と言っても、やはり山道であり、日本の縦走路のように狭い所もある。そこへ、前らゾッキョの行列がやってきた。ゾッキョは、けっこう気性が荒いところがあり、前に立ちはだかっていると、角ではじき飛ばされてしまう。僕は、ゾッキョが通れるくらいの幅を確かに開けた。これは記憶に確かである。しかし、なぜかシェルパがどなっている。いや、しかりつけるような強い調子で、怒っているというような感じだった。最初何をどなっているのかわからなかった。そして、やっと、ちゃんとどけ、と言っているということがわかった。しかし、自分は、きちんとどいている。まだどなっている。さすがに少しムッとしてしまった。アイランドピーク登山の時も、帽子を子供にかぶせるがごとく、強引にかぶせてくるのである。見下げられてるなという感覚が、ずっとトレッキング中にあり、この時も、よくわからないことでどなられていたので、あまりいい気持ちはしなかった。そして、最後に、反対側にどけということがわかった。

彼は三国友好エベレスト登山隊にも参加しており、それだけでなく、エベレスト遠征隊には何度も参加してい

る。油ののりきった、20代のシェルパである。剽軽さも手伝って、今までの実績、コネクションは暇さえあればアピールしてくる。誰が見ても、すごいシェルパであることがわかる。しかし、なぜか、自慢して、その結果、すごいことがわかっても（事実一流のシェルパである）素直に受け入れることができなかった。

うちの山岳部は、一日の行動の記録としてリーダーは行動記録、メンバーは天幕記録というものを書くように渡される。ゾッキョの事件があった日、さすがに天幕記録は、心の小ささが如実に表れていた。今思えば、谷側にどいていたのだなということがわかり、たいへん恥ずかしい。天幕記録とは別に、誇りに考えたメモがある。さきほども言ったように、トレッキング中のものの考え方は、少しキザになってしまう。

『誇りとはいったい何だろうか、思うに誇りと自慢する心は紙一重であると思う。自分本人は誇りとして誇示し、その誇りに対して当然なる敬意を求めているのであろうが、見方を変えれば自慢しているのと変わらないのではないだろうか。では自慢する心と誇りとはどのような違いがあるのだろうか。それは思うに、前者は相対的、後者は絶対的なものであると思う。つまり、相対とは、自慢とは、その本人は自信まんまんであったとしても、あるものと比較すればむなしいものであったり、滑稽であったりする場合のことなのである。誇りとはその周りをとり囲む人々の心の中にごく自然に、または必然的に敬意、尊敬の念が湧いて出てくるような存在、または存在感も持つものであろうと思う。思うに誇りを真実行使しているのは、人間が作り出した絶対的存在、神または光の速度のようなものしかいないと思う。極言をすれば、人間には誇りは所有できないのである』

ゾッキョ事件の日から数日後、ゴーキョピーク登頂があった。そこでは、後で、谷側にどいたことから心の小ささを後悔したのではなく、もっと別の意味から、ウォンチュ・シェルパにおわびの気持ちが湧いたのである。

『神に怒りなどない。神には、人間のもつ喜怒哀楽のような感情とは超越したものを持っていると思う。人間が怒った時、その心の小ささ、醜さに後悔するであろう。世間では、神の怒りとか言う時があるが、これは、おそらく、邪心や、悪魔のしわざであろう。怒った神様なんて格好悪い。山を歩いていると気分が高揚する。それは、人間の感情の中では楽か喜に近いと思う。それらの感情と違うのは、その高揚している心の下に、何か勇気みたいなものがあるのである。山にきて頂上に立つと、誰でもそれを持つと思う。もしも、神様がその感情を少しでも持っていらっしゃるのなら、僕は、恐れながら光栄です』

ネパールの食事

家口　寛

僕がアイランドピーク登山の計画に参加した理由は、他の学生では味わう事の出来ない経験がしたかった事と、ヒマラヤの山やそこで生活している人間を見てみたかったという理由です。しかし、本当に山を始めて２年の人間に、ヒマラヤの 6,000mの山が登れるのだろうかという不安はありました。高所登山の本を読めば読むほど高山病の事が恐ろしくなり、自分の体は、仲間の体は、6,000mという高所で動けるのだろうかと不安に思いましたが、無知より恐ろしい物はないのでコーチ会、理事会、また、医師に話を聞いたり、本を読んだりして高山病の予防や、高山病にかかった時の対処のしかたなどを勉強して、いくらかは不安をやわらげていきました。

もう一つ日本にいる時からの不安であり、また楽しみであるものがありました。それは現地での食事です。僕は生まれてこの方日本以外の国に行ったことがない人間です。その人間が２ケ月弱をまったく日本と違った大陸の風土で過ごし、食事をして体をこわさず山に登れるか不安でしたが、旅の一番の楽しみはその土地の物を食べる事です。なんでもこわがらずに食べてみようと思って日本を出ました。

カトマンズはさすがにネパールの首都だけあって様々な料理が食べられますが、やはり熱い地方なので、どの料理も香辛料を多くさん使っていて味は辛いです。また、日本の米とは違い細長く、ぱさぱさしているので御飯だけで食べるには、やはり日本の米に慣れているせいか、味はもうひとつでした。

さてアイランドピークを登る為にカトマンズを飛び立ち、クーンブヒマラヤの入口であるルクラという村に行くとそこは、カトマンズとはまったく違った国に来たようです。

カトマンズはインド系の人々であり、ヒンドゥー教徒であるのに対して、クーンブの人々はチベット系であり、熱心なラマ教徒であり、家々には、国王の写真とともにダライラマの写真がかざってあります。村のあちこちには仏塔やマニ石と言ってお経の刻んである石があります。その中を荷物を多くさん持ったヤクの群れが通り、いかにもヒマラヤらしく思えました。

僕らはトレッキング中バッティーという日本でいうと

ころの山小屋に泊まりながらヒマラヤを歩きました。バッティーは、季節労働で乾期の間だけ働き、家族ぐるみで小さな子供まで僕らにお茶を持ってきてくれます。シェルパ族の故郷では、村長の経営するバッティーに泊まりました。さすがに他のそれとは違い立派でした。

バッティーの朝食はチャパティーという、小麦粉をねって焼いたホットケーキのような物をミルクティーといっしょに食べます。これはカトマンズの町のインド料理屋で食べたナンという食物とそっくりで、味も同じでした。シェルパが朝あまり食べられず残すので僕らがこれをわけてもらい、ジャンケンをして取りあっているとシェルパが喜び以後これが習慣になってしまいました。

昼は主に焼飯を食べ、夜は、タルカリダルバートといった、豆のスープ、野菜のごった煮、それに御飯のついた定食みたいな物を食べました。しかし、トレッキングも終わりに近づくにつれ、持ち合わせの金がなくなり、朝から晩まで、ふかしジャガイモを食べるはめになりました。最初はそれでも良かったのですが、だんだん飽きて、みんなで「オデンが食べたい」だの「ラーメンが食べたい」だのと言いだし、食べる想像をしては楽しんでいました。

現地で変わった食物というと、ツァンパという料理です。これはヤク使いの人がよく食べていました。小麦粉をヤクのチーズにつけて食べるのですが、味はというと、僕はなんだかくさすぎて食べられませんでした。

今思うとこのように日本と食生活の違った所で、よく2ケ月弱過ごしたと思いました。この遠征は僕にとって良い経験だったと思います。

最後にこの学生だけのヒマラヤ遠征を成功させる為に理事会、コーチ会を初め、諸先輩方に色々とお世話になり本当にありがとうございました。

■個人山行

―― 鹿島槍ヶ岳・天狗尾根 ――

期　　日　3月4日～3月8日

メンバー　L山本、渡辺、勝又

3月4日　　曇時々晴　大谷原→ 1,800m

大谷原の手前、鹿島槍スキー場への分岐でタクシーを降りて雪道を歩き出す。大谷原の橋の上でワカンを履いて出発する。昭和電工の吊橋の辺りから積雪が多くなる。天狗尾根に取り付いても、グズった雪と露出した岩と木と泥のミックスした斜面で、非常に悪い。だましだましの登るが、2回目に渡辺が滑り落ちた所からアイゼンを着け、ザイルを1ピッチ出す。尾根上に出てからは膝までのラッセルになる。3人ではスピードが上がらないが、予定通りの所で幕営。

3月5日　　曇時々晴　CS→第二クーロワール

今日もやや雲が多いものの天気は良い方だ。ゆるやかな尾根から突然10mの雪壁になり、その後は左右に雪庇が出ているややクラストしたリッジを行く。第一クーロワール手前でザイルを出す。3ピッチで越えるが、その上がさらにシビアだったので、もう1ピッチザイルをつけていく。この辺りは緊張させられるリッジと斜面が続くので満足に一本を取るところもなく辛い。その後もリッジと小規模のキノコ雪を左右に巻きながら進み、第二クーロワールの手前50m位の所まで行く。この雪壁は雪崩の跡があり、所々シュルンドが口を開けていて全層雪崩が起きそうなので明日の早朝に越えることにする。スコップでリッジを切り下げ、なんとかテントを張れるだけのスペースを作る。ここからは荒沢奥壁がバッチリ見える。まさに絶悪の壁という表現がピッタリの壁だ。

3月6日　　晴　CS→荒沢の頭

今日も良い天気だが、気温は低く、肌がピリピリする。クーロワールはしっかり凍っているのでよくアイゼンが効き気持ちがいい。途中、完璧に凍り付いている所や、逆にグサ雪の所、うまくビレーポイントが作れない所、直登できないような大きなギャップなどがあり、完全に越えるまでの5ピッチにかなり手こずってしまった。そこからは黙々とラッセルをして天狗の鼻に着く。あいにく鹿島槍北壁はガスで覆われ、天狗ノ鼻は強風にさらされていたので、ろくに休みもとらずに先へ進む。最低コルへの尾根は雪庇が全て落ちてしまったらしく、ただナイフリッジのみであったが、慎重にスタカットで行った。コルからは、雪壁と緩斜面が20m位ずつ繰り返しながら小舎岩へと続いている。小舎岩を右から回り込むと小岩峰の第一の壁に出る。ここでザイルを出し、予想外に手こずってしまったが、荒沢ノ頭はすぐ先なので頑張って歩く。荒沢ノ頭の南斜面を切り崩して幕営した。

3月7日　　雪　CS→冷池小屋

今日は朝から風が強い。いつも通り準備をするが、まったくのホワイトアウトなので一時待機とする。やや風が弱まり、少しは視界が良くなったので出発する。新雪のナイフリッジが続いている。スタカットで北峰まで行く。ここからコンテにするが、南峰への登りで2回スタカットにしなければならなかった。ここからコンテにするが、南峰の頂上でこの日最初で最後の一本を取る。ザ

イルをしまい、コンパス片手に縦走路を下る。樹林帯に入ってからは、吹雪にラッセルが加わり、なかなか前に進まない。冷池のキャンプ場で30分程小屋を探し、やっとのことで見つける。

3月8日　晴　CS→大谷原

天気は良い筈なのだが、とにかく風がものすごく強く、ホワイトアウトのようになってしまっている。一歩一歩踏み締めるように歩き、赤岩尾根が派生するピークから下り始める。最初のうちは視界の悪さと、雪の不安定さにより困難を極めたが、下るに従って視界だけは良くなり、順調に下れるようになった。高千穂平からはクライムダウンを交えながら黙々と下って行き、とうとう行きに休んだ大谷原の橋に戻って来た。

《個人山行記録》

・富士山
　5月20日～5月21日　L菊谷、中津留、山本、秋山、田端、下村、渡辺、勝又、野本、家口
・奥秩父　笛吹川、久渡沢、ナメラ沢
　6月3日～6月4日　L渡辺、下村
・谷川岳　烏帽子奥壁、変形チムニー
　6月4日　L菊谷、野本
・丹沢　水無川セドの沢
　7月1日　L渡辺、勝又、伊藤
・丹沢　葛葉川本谷
　7月2日　L中津留、田端、星野、大越、平井、田山
・奥秩父　丹波川小常木谷
　9月14日～9月15日　L渡辺、下村、田山
・北アルプス　屏風岩登攀～北尾根～岳沢
　10月1日～10月5日　L菊谷、田端、山本、平井、OB古野
・東北　八幡平～岩手山・秋田駒ヶ岳
　10月1日～10月5日　L渡辺、勝又、伊藤
・北アルプス　槍ヶ岳～笠ヶ岳
　10月7日～10月10日　L下村、田山
・足尾山塊　松木沢アイスクライミング
　2月9日～2月11日　L山本、勝又、田山、伊藤
・東北　吾妻連峰スキー縦走
　2月13日～2月16日　L勝又、渡辺、田山、伊藤
・北アルプス　後立山連峰・鹿島槍ヶ岳　天狗尾根
　3月4日～3月8日　L山本、勝又、渡辺

■岩登りトレーニング

鷹取山	2回
三ツ峠	2回
日和田山	2回
広沢寺	2回
越沢バットレス	2回
氷川屏風岩	2回
小川山	2回
城ヶ崎	1回

■高所トレーニング

富士山	6回

■その他

・新人歓迎山行
・天幕懇親会
　11月11日～12日　奥多摩氷川キャンプ場

桜門山岳会

―平成元年度活動報告

桜門山岳会理事長　中嶋　啓

平成年間を迎え、桜門山岳会のより以上の発展を…と言うこともなく、まずは学生山岳部の活動し易い環境づくりとＯＢ会については親睦を深めるため懇親（山行）の機会をより多くし、また会員相互の情報周知を図って来ました。

桜門山岳会短信については、引き続き全員配布とし、また、会報27号の配布にあたっては、全会員に無償配布させて頂きました。

短信および、会報の発刊・配布とも桜門山岳会会費の元資を食いつぶしているかも知れませんが、短信・懇親（山行）の機会を多くする事により、山岳部の活動状況やＯＢ諸氏の状況を知る事によって、より以上の山岳部や桜門山岳会への関心がすすむ事を願って、昨年度同様に実施して来ました。

学生山岳部の状況は、国の内外で春山を実施し、国外ではトレッキング登山とはいえ、学生４人によるヒマラヤ登山を行い、アイランドピーク(6,169m）登頂を果たしました。

一方国内では、天狗尾根→鹿島槍ケ岳（３月）、北海道中央高地（３月）に出掛け、まずまずの成果を挙げております。

しかし、一昨年夏山での落石事故、昨年11月・富士山山行での滑落事故と事故が続いており、いずれも新人による事故であり、今後の山行にはより以上の精進を図って欲しいものです。一昨年の事（部員の獲得問題）が夢のようでもあり、昨年迎えた10人の仲間は数こそ減りましたが、山岳部活動の中心的役割を果たすようになり、今後が楽しみです。

それにはリーダー不足の解消を図るため、コーチ会を中心とした若手ＯＢの努力の結果であると思います。

部員獲得に当たっては、大学山岳部の当面の目安である部員数の二桁は確保しています。本年度の結果は入部者６人→現在３人が頑張っています。

平成２年度の部員募集に当たっては、先の募金の一部を使わせて頂き、揃いのジャンバーを用意して、より多くの部員獲得を図るとの事です。

桜門山岳会短信発行は、緊急性や経費上からも極力少なくして来ましたが、やはり、会員への情報手段としては多少の出費は覚悟し、戦後長らく続いていました《時報》的役割を持たせ、１人でも多くの会員が読み、そして行事や集会、ある時は募金等に協力して頂けるよう努めてます。

その成果と言っては叱られそうですが、今回の募金は予想以上の募金があり、集纏責任者としてご協力下さいました方々に、この紙面を借りまして改めてお礼を申し上げます。

しかし、一方では今の学生が羨ましく感じる複雑な心境です。

集会・山行等については、追悼会の名を借りての集会でしたが、８月の剣澤では戦前活躍されたＯＢ諸氏が多数参加され、健康上無理のきかない土肥・野田ＯＢに至っては、無理をおして雷鳥沢（立山山荘）まで登って来られました。

また、杉田屋での、文蔵（佐伯文蔵氏）と戦前の方々（星野、崎田、真島、野田ら）との再会ぶりには感動させられました。

木曾・御岳は天候にも恵まれ大半の参加者が頂上に登る事が出来ました。

故山口監督を偲ぶ会では、80名（ＯＢ60名）におよぶ方々がご出席くださり、遠くは広島（松井）、福井（関）、関西（岸田）諸氏らが駆け付けて下さいました。

会合場所（ＯＢ会ルーム）については、《入来・上関両氏の50回忌ケルン詣で》を契機に故入来重弘氏のお兄さん（入来重則氏）が提供して下さいました。港区北青山の入来ビルの会議室を７月（ビル改築）まで、理事会で使用させて頂きました。

一方、１月に入り、大城氏の所有するマンション（アルティール新宿）の提供もありましたが、年数回の理事会と多少の集会場所としては、贅沢な上、一個人に多大な負担をかけるので、監督・コーチ・若手ＯＢらに使用の有無の討議を一任しましたところ、桜門山岳会ルームとしては借用しないとの結論を得ました。

大城氏の申し出は誠にありがたい事でしたが、桜門山岳会の財政状況では維持経費を大城氏個人にお掛けする

ので使用しないことにしました。

今後も桜門山岳会の方向性としては、あくまでも学生山岳部の側面的支援を軸として、若いＯＢや学生達の活躍し易い環境作りではないかと思います。

今回、学生による海外登山の成功は今後、後輩たちに良い方向で受け継がれて、数年後に再び海外遠征が提起されるかも知れません、その時にも今回同様に、出来る限りの協力ができるＯＢ会でありたいものです。

ＯＢ会の姿として《金は出すが口は出さない》とまでは言いませんが、我々も山を歩き、楽しいＯＢ会としたいものです。

今年度は、さしたる行事もなく終了させて頂きました。活動経過を添付しますので、併せてご一読願いまして活動報告を終ります。

平成元年度（桜門山岳会）活動経過　　平成元年４月～平成２年３月、（　）内；学生

会合	回数	月日	場所	主な内容	出席者
定例理事会	1	6．1	表参道入来ビル	元年度事業計画等の決定	7
	2	7．14	〃	会報27号、剣澤集会等について	7
	3	10．6	千石・宮長スタジオ	部活動・御岳集会等	13（3）
	4	12．5	原宿・かつ半	忘年会と役員会を兼ねて	26（3）
	5	1．8	アルティール新宿	学生・トレッキング計画と募金、ＯＢ会ルーム、都岳連加入等について	15（2）
	6	3．16	〃	学生・海外登山の募金報告及び平成２年度役員について	10（2）

集会とＯＢ動向	月日	場所および内容	参加者
	8．24～27	剣澤小屋集会　北アルプス・剣澤小屋 （高橋計介氏・33回忌と剣岳に眠る水越・伊知地両氏を偲ぶ会）	34
	10．14～15	木曽・御岳　玉滝村・たかの湯	16
	11．11～12	秋期天幕懇親会　奥多摩町・氷川キャンプ場	27（11）
	9．3	西田勇一氏・一周忌　白山・竜泉寺	8
	9．12	河内邦介氏・一周忌　谷中・瑞輪寺	10
	11．30	宮原　巍氏～ヒマラヤ観光開発㈱ 創立20周年記念パーティー　京王プラザ	12
	2．16	山口摂郎氏を偲ぶ会　アルカディア市ヶ谷	78（5）

寄　稿

ヒマラヤ トレッキング

昭和17年専経卒　本片山 数雄

我々地方会員は卒業と同時に本部とも疎遠がちで、従って山行も稀であるのが通例だ。

私は山へのひたむきの思慕たちがたく、単身で出掛けておった。ヨーロッパアルプスも眺めて来た。だがその喜びを分かち合う友が欲しかった。久しく交流のなかった松井君を昭和62年正月、近くの山に誘ったのがきっかけとなり、後は意気投合、２人の山行を重ねることになった。

特に彼は山への復活へ、とみにのめり込んで了い。熊さんとヨーロッパアルプスを１ケ月かけて巡って来て、我々老骨の身では、あと幾回も登山出来そうにない。ここらで念願のヒマラヤを見に行こうではないかと言うことになった。岳人ひとしく望まぬ者はないであろうヒマラヤへである。

さて出掛けるとなると色々と問題があるものだ。やっと家族の同意を得て、早や心ははやるばかりである。松井君より平成元年３月にツアーで出発する良いのがあるから申し込んだと言って来る。それでは一緒に行こうと決定した。常日頃、市内の図書館（山に関しての図書豊富）通いをして、その方面の知識は出来上がっている。

３月11日、香港よりネパール航空でその日のうちにカトマンズに19時20分入りえた。従来は途中１泊２日かかったようである。今回の企画は、アンナプルナの南側の前山を、Ｃの型に、最終ゴラパニ峠でダウラギリを眺めるツアーである。

ここで特記しておきたいことはパスポート発給官庁で、ネパールでは「行方不明の外人があった」「生物に注意しろ、ウィルス肝炎になる」。又、これはツアーが済んでのことであるが、「最近燃料、食糧が不足しているから、緊急以外は旅行を見合わせよ」と掲示されてあった。

12日、カトマンズからポカラへはバス又は飛行機で入る予定であったが、15時の飛行機便となったので時間に余裕が出来た。松井君はインスタント日本食を持参しているが、バーナー用のガソリンを機内持込み出来ないから持参していない。探しに行こうと歩き廻ったが、見当たらない。ヒマラヤンジャーニーの裏で富士レストランと言うのに入ったら、宮原君の弟さんの経営で、彼の事務所へ案内してくれた。エベレストビューホテル再開準備に来ておったのである。

カトマンズより愈々ポカラへの機上の我々は、雲海の上に憧れのヒマラヤの高峰、マナスル山群を見た時は、感激ひとしおで、“あゝ、ネパールに遂に来たんだな”と、しみじみ身の幸福を味った。

ポカラでは、我々一行17名をオンボロバスとポーターが出迎え、30分程走ってジープ３台に乗り替え、乾季なので街道よりはずれて河原の浅い流れを大揺れしながら渡り、今夜の幕営地フェディに到着。天幕は２人ずつで、充分広い。マットレス敷きに外人用のシュラフが用意されている。

13日、６時起床。７時、いよいよトレッキング開始。ポーターに持たせる荷物をまとめて天幕外に出しておくと、次の泊まり場までハイザック丈の軽身でよい。

尾根に向かって林の中、いきなり平らに剝離した石積みの急坂となる。それぞれマイペースで「ビスタリー、ビスタリー」と進んでくれといわれる。ビデオカメラを持参の高年齢者で肥満の人がいたが、荷物が多くシェルパの手助けとなる。私は睡眠不足の体調で少しこたえたが、トレーニングしていたから自信をもって行けそうである。シェルパは前中後と一行をはさみ、ツアーガイドとサーダーは適宜前後する。小１時間で最初の高みのバッティーで一休み。一汗かき、ランニング姿になると日が昇ってきた。畠地と山上の村落を次第に高度を上げながら登って行く。若い人はどんどん先に追い越して行く。シェルパが小さい太鼓を持参しており、その音がこだまして来る。対岸の谷を隔てて長い尾根が下っている。ノーダラで、最終日に通るところである。自動車道が出来るらしく白く山肌が削られて見える。前山超しにアンナプルナが見える筈だが雲が立ち上って見られない。

ダンプスにてチェックポストがあり、サーダーがパーミッションを一括持って来るとて待たされるが、結局この地区では不要の様子。その間、村の学校の改修の寄付の申し出があり、それぞれ寄進する。登校中の子供に会う。盛んにペンシルと言ってねだる。文房具でも不自由なのだ。甘いものは与えてくれるなとなっている。遙か尾根続きの峠らしきところに白い家が見える。あそこを

越すのであろう。気が遠くなりそう。デイウラリと言うところで下りとなる。ＤＥＵＲＡＬＩと言えばこの地区、同じ地名が地図に見られる。峠状のところを言うのであろうと私の解釈である。ある本にデオラレイとは石を積み上げた小塔（日本のケルンに似ている）と有る。

バッティーのいたるところでホテルとかレストランとか、地名も英語で書かれた看板が出ている。トレッカーが食事をしたり泊まったりする小屋がある。如何に観光受け入れが盛んであるかうかがえる。昼前に小雨がパラつく。キッチンボーイが先行して食事を作っていて、雨なのでバッティーの店先が利用される。

歩行中は汗、止まれば寒くなる。どんどん下りとなり、山腹をからんで谷を廻りこみ、棚田上の村ランドルンへ着く。既にテントが張られているが、一部足りない。それにポーターに持たせた荷が到着していない。何だかガイドとサーダーが話している。途中でポーターがへばって逃げたようだ。サーダーが引き返した。ポーターを雇い替えるのであろう。食事は何とか支障がなかったが、夜明けになっても届かないハプニングが有った。私はこんなこともあろうかと充分用意したので、不自由なく過ごせた。

私はこの旅の道中、写真を撮ったり、コース記録をとったりするので案外忙しい。松井君とは離れ離れ、夜は只寝るばかり。その日記録をまとめ、昔を話したりしていると、彼はもう寝息が聞える。

14日、夜中星がキラメキ、高峰が夜空にシルエットをなしている。夜明けとともに山並みはモルゲンロートに輝き出した。カメラの放列となる。アンナプルナサウス、右に尾根が下ってピラミッド型のコブが盛り上がっている。「パタルヒウンチュリーです」とガイドから教わる。谷をへだてて間近に新雪を戴いて仰ぎ見る姿は、実に荘厳である。

さて、昨日の行程は７時間。今日も長そうである。深いモディコーラの谷を下って向いの山腹を又登る訳だが、登りとなると、やはりきつい。あたりは立木がなく、まさに耕して天に至る段々畠の連続である。

高峰はもう雲が湧き、まとわりついて頂稜は見えかくれ。少し、もやって来る。谷の奥チョモロン方面、所謂内院は雨雲が立ち込めている。かなり大きい村ガンドルンに着き、昼食の頃は日差しが良くなる。雲の切れ目に鋭鋒マチャプチャレの特徴の有る、名前の通り“魚の尾ヒレ”のような双耳の頂稜をなしている。ピラミッドの姿で、中段よりゆるく長く尾根を引いて望まれる。ポーターに持たせた荷がやっと間に合う。谷筋を登って行く頃、小雨がパラつく。午後は、決まった天候のパターンだ。今日の泊場タラパニは昨日より高所で、赤いシャクナゲの満開近い花越しに、アンナプルナサウスの南壁が堂々と中段以上も見えるところである。

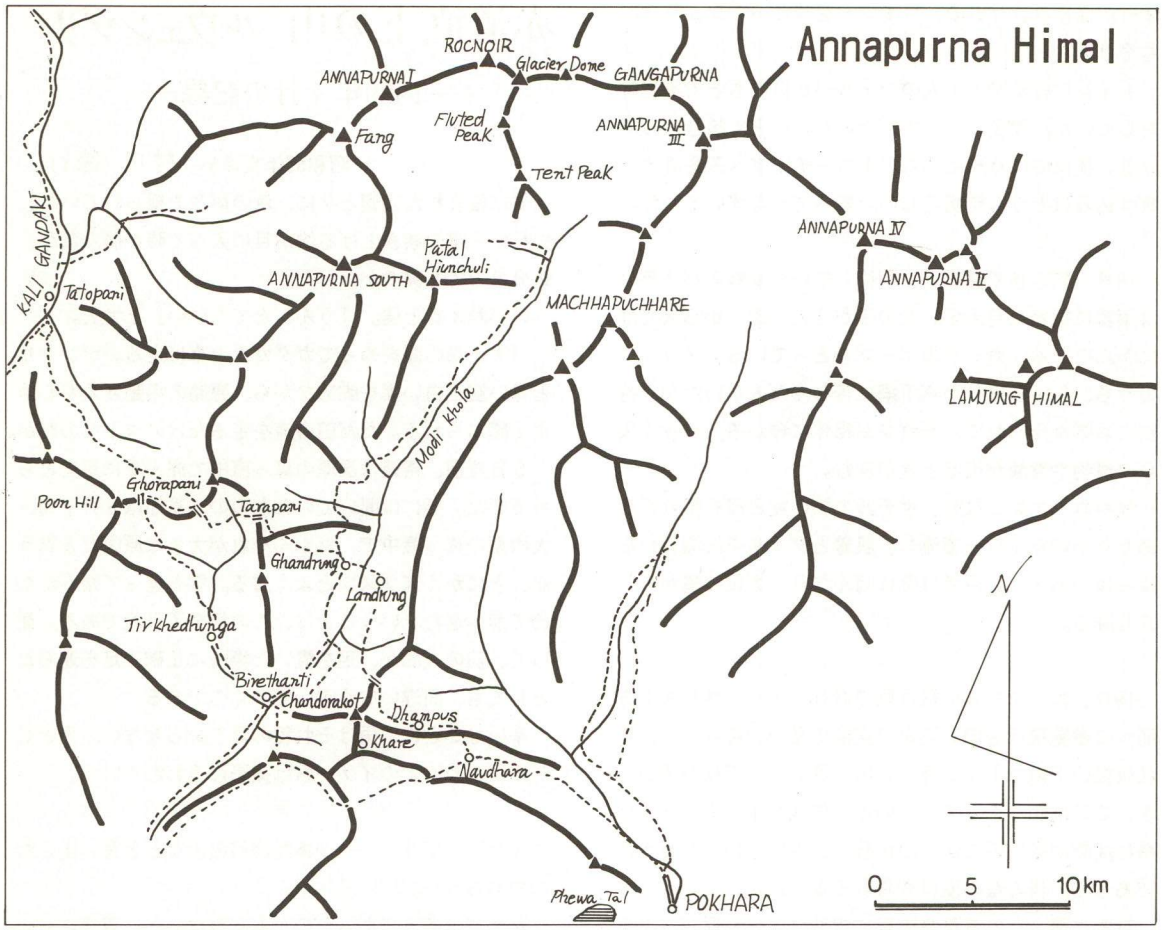
15日、シャクナゲ（現地語でラリグラス）の樹林帯を小さな谷を渡り、山腹をからんで進むと、林の中で白い猿が２匹、飛び渡っている。シェルパのラムさんが、「カメラを貸せ、撮って来てやる」と、谷間をすっとんで行く。彼はインド系の顔をした青年で、父はこの度の戦争で死んだと言う。このようなツアーに度々来ていて、サブサーダーと言ったところ。英語が可成り出来、日本語も習いたがって、皆んなともよく話している。たちまち人気者になって来る。私が少し英語が喋れたので良い相手となり、日本語の疑問を英訳することになるが、単語が思い出せず、人気者の英訳がとうとうわからずじまい、遂に私を“ティーチャーさん”と言いだし、道中色々と知識の交換が出来た。

日当りの良い独立木のシャクナゲは、みな満開の赤い花である。谷間の道に残雪が見え出し、例によって時雨がやって来る。コース最高所デオラリ峠(3,150m）で雨は止み、展望のきいた草地の尾根を下る。前方が広け霰が降り出し、泊地のゴラパニに着いたら天幕が白くなっている。夕食までバッティーで暖をとる。このあたり、蛭の多いところだ。時期早く被害にあわず。

16日、此処より、カリガンダキ上流の広けた谷間遠くにダウラギリがやはり 8,000m級の高峰を見せる。佇立して、ツクチェへと屏風を連ねた如く、間近には前山越しに南峰、その肩に１峰も仰ぎ見られる。空は高曇り、山容ははっきりしない。

今日からは帰りのコース。直ぐ真上のプーンヒルへ若い人は朝食前に出掛けたが、どうせぬかる道だろうし、私等は遠慮する。ジョムソン街道なので、ロバの隊商の列に度々会う。鋼材や長いパイプ、セメントをかつぐポーターも続々登って来る。何処かで橋でも出来るのであろう。ナンゲタティを過ぎ、ブルンディコーラ左岸の山上越しにマチャプチャレが白い氷壁の頂稜のみをのぞかせる。この方が凄みがある。空はやっと晴れ渡り、暑くなる。25℃。人通りも多く、外人のトレッカーの中には日本人の青年が自転車をかついで登って来る。何処で乗れるのだろうか。

昼食は広い段地の芝地で、日差しは強いが心地よい。



そよ風が吹く中、例によってチャパティーや油いための野菜と言ったところ。

広い谷間を川沿いに下り、ブルンディコーラの出合いの村、ビレタンティに着く。村の中央の吊り橋を渡り、バッティーの中庭にテントが設営され、売店は多くのトレッカーで賑わっている。ここには公衆トイレが在るが山中ではトイレットテントが設けられる。手洗いは、私はウェットティシュのロール巻きで切れ目の入ったものを持参したが、甚だ重宝であった。毎朝の洗面は、湯の入った洗面器がテント前に置かれ、ビスケットとモーニングティーが出される。うがいは前夜テルモスに湯を詰めておき、行う。

17日、今日こそ快晴。ビューポイントである。チャンドラコットへの上り、ロバ隊が急坂の石畳道を蹄を鳴らしながら下って来る。頂上には展望所と土産物店が立ちならび、ここより仰ぎ見るアンナプルナサウス、マチャプチャレ、遠くガンガプルナが白銀の鎧を纏い青空に聳えているのは、実に素晴らしい。来し方の谷間から前方の峠へ向って、自動車道が盛んに工事中である。初日に見たところへ続くのである。中国人らしい技師も見かける。四角いスレート石瓦を葺いた家も見かける。林道を下っていると、白い横断幕を持ちチャルメラを吹いた男ばかりの集団に出くわす。道を譲っておると、布に包まれ担架に担がれた子供の屍らしい葬儀の列であった。

道路工事は大型ダンプが砂煙を立て行き交い、発破作業も行われている。ネパールも近代化の波が押し寄せている。いずれは車で数時間で入ることが出来、これから奥ジョムソン迄のアプローチが近くなることであろう。ノーダラの村落は尾根上の宿場だが、ガイドブックで見た家並が片側すっぽりこの道路に取られている。

尾根上の芝地は最後のキャンプ地で、遙か遠くアンナプルナⅠ、Ⅱ峰の頂部は、雪がつかず灰色の岩壁を見せて夕日に映えて見える。ポカラ盆地のペア湖が青く光って春霞みに包まれている。

テント場には物売りが寄って来て、品物を広げて買えとすすめる。子供も相変わらずペンシルと言って集まって来る。最後の夜とてシェルパ達の踊りを交えたパーテ

ィーが催され、ラム酒、ロキシーを味わってシュラフにもぐり込む。

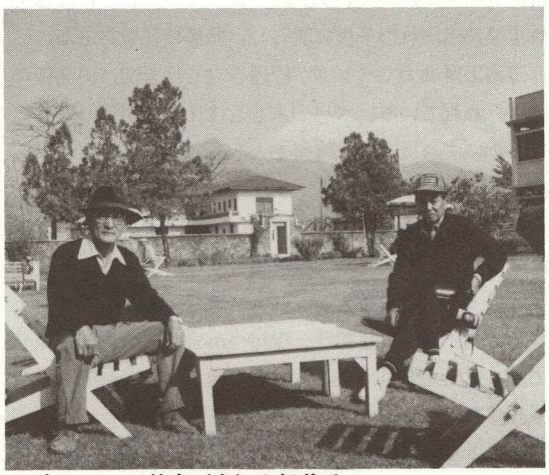
トイレに行く時、1人のシェルパが灯のもとで不寝番をしていた。連夜そうしていたのだ。ひどく咳き込んでいる。夜はやはり冷え込む。トローチとアメ玉を渡す。咳き込みはどうも持病らしい。黙ってうなずいていた。

18日、朝起きて見ると、期待していた高峰のパノラマは雨雲に被われ見えず。女の子が2人、速くから来てはにかんでいる。カメラのポーズをとっている。メンバーのうち、しょっぱなから下痢に苦しんだ人がいたが、特別にお粥が作られて、それをお相伴に預かる。パック入りの漬物や醤油が出ると食が進む。

無事コースをこなし、ホテルで旅の埃と汗を限り有るあたたかいシャワーで流し、肌着とタオルを洗濯したら、真っ黒であった。戸外は急に暗くなり、大粒の雹が一しきり降る。

19日、カトマンズに飛行機で帰り、翌日エベレスト方面への遊覧飛行を申し込んで空港で長い間待っていたら、私は軽い下痢でトイレ通い。出て見ると、天候が悪いのか、ここは明るくガスっているのに飛行中止となる。食事は油物が多いのだが、油が悪く、古いものでも使うのであろう。皆んな一度はやられるようだ。

日本に帰った21日祭日の昼、空港はごった返し、夕方の東京駅のプラットホームは寒々としておった。松井君は鼻風邪気味。ヒマラヤは、私にはさらばであろう。松井君は再度、近く訪れることをもくろんでいる。



▲ポカラにて 筆者（左）と松井氏

赤道直下の山 ルウェンゾリ

――1989年4月の記録――

昭和55年文理卒　村口　徳行

僕は積まれた装備と共に、車の荷台で揺られていた。先行する車の巻き上げる埃が目に入って時々痛んだが、気分はとても爽やかだった。

「いいねえ」と僕。「うん、とてもいい」と大矢。

バナナ畑の間をぬってガタガタと車は走る。ボンヤリと青い空と白い雲を眺めながら、悪路の振動さえも心地よく感じられる。ただ田舎道を走るだけのコトなのだが。

5日程前、僕達は湿原の真っ直中で泥んこに足をとられていた。話には聞いていたものの、季節は3月下旬、大雨期の真っ最中で、たぶんそれが大きな原因だと思うが、とにかくズブズブとよく潜る。雪と違って踏みかためて前へ進むということは、この場合不可能である。従って、前の人間が、足を置いた場所に正確に足を運んだとしても、間違いなく潜ってゆくのである。

幸いなことに、雨はそれ程の量を降らせない。僕とビデオエンジニアのイノー君は撮影に追われていた。

＊

ルウェンゾリ ―― 一体誰が幻の山などと言い出したのであろうか。

かつてはそうであったのかもしれないが、現代においてはすでに幻のイメージとは大きく変わってきている。ルウェンゾリというヘンテコな名前を初めて知ったのは僕がまだ高校生の頃だったろうか。「女ひとりアフリカ放浪記」とかいう辰野嘉代子著の本からだ。それから十数年、どうしたわけか、ルウェンゾリへ行くことになり、その頃抱いたアフリカのイメージが蘇るのであった。

19世紀、ヨーロッパの探検家たちが、ナイルの源流を探し求めた旅の歴史がそこには重ね合わされる。南太平洋の湿気を含む気流が西側から山に当たるため、一年のうち 360日は雨が降ると言われている。豊かなる雨はやがて白ナイルに集まり、“エジプトの母”となって地中海に注ぐ。スタンレーは“月の山”をあらためてルウェンゾリ（「そこから雨がやってくるところ」という現地語）と名付けた。

高温多湿の原生林の中を抜け、奇妙なセネシオの林を通り、僕たちはブジュク小屋に着いた。ブリキでできたなかなかの広いヒュッテだ。ストーブに薪をくべれば、幸せな山小屋の生活なのである。

しばらくしてふと気づくと靴がない。どこへ行ってし

まったのかと辺りを見渡すと、撮影機材を背負っていたポーターが小川で洗ってくれている。僕は、どうせ翌日泥んこになると思って、ほったらかしておいたのだ。

「そんなことをしなくてもよいのに……」僕はつぶやきながら彼に礼を言った。彼はニコッとした。歳は聞いていないが、あきらかにおじさんであることは間違いない。その笑顔に僕は憂鬱な空とは裏腹に、気分が晴々となった。

翌朝、登山隊の3名がブジュク小屋を後にして出てゆくところを撮影し、すぐに後を追いかけようとした。ところが、思ったように事が運ばないのがアフリカなのであった。

ポーター頭がなにやら騒ぎだした。僕とイノーくんは、早くも先行する3人を追いかけなければならないはずなのだが、現実は小屋を出れる状態ではなかった。

ポーター頭が言う。

「長靴が足りない。8人分しかないからこの荷物は全部は運ぶことはできない」

荷物は全部で14個。エレナ小屋まで3～4時間で行けると聞いていた。

「おいおい、そんなコト、オレらに言われても困るじゃネエカ！」

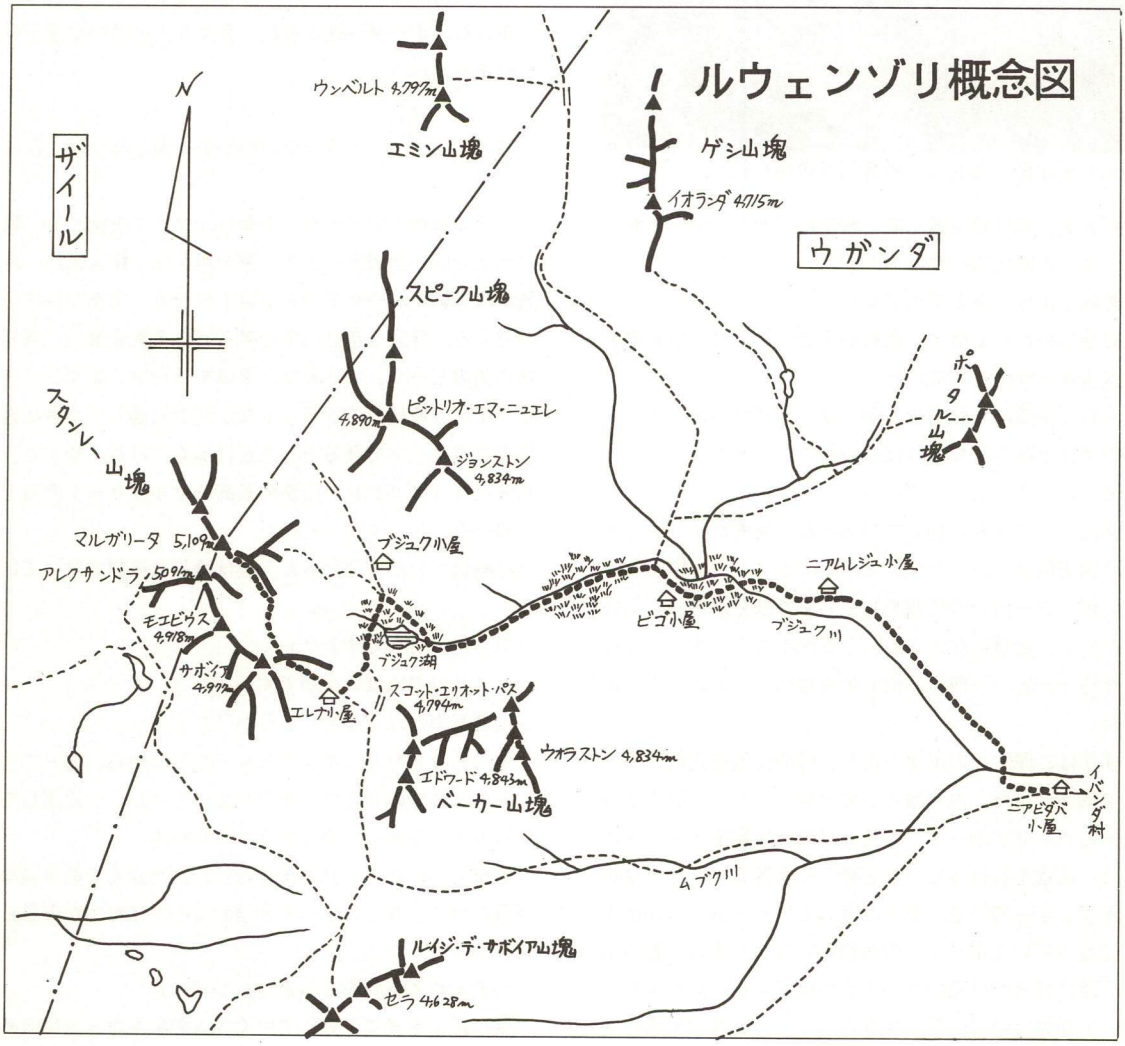
「この先は危険で雪が出てくる。靴がないと行くことができない」

「靴は17足分ぐらい買ってあるはずだろう。それはどうしたんだ。なぜ、そういうことを早く言わないんだ」

僕とイノー君は、仕方無く余計な食料・装備類をこの小屋にデポすることにした。荷物は11個に減った。もうこれ以上、減らせない。

僕はポーター頭に文句をたれた。

「おい！　これで全部だ。とにかく、これ全部必要だ。どうしたらいい。おまえさんのアイディアを教えろ！」



▲エレナ小屋への登り。熱帯雨林の中を行く。

ポーター頭は数分考えて、何やらゴチャゴチャと他のポーターと話を始めた。

「長靴３足分、あとで金でくれ」

結論はいたって簡単、最初からそう言えばいいものを、僕は少々イライラしていた。

「くれてやる。くれてやるが、イバンダ村のおまえさん達のボスと話をしなければならない。そうだろう？」

「そうだ、そのとおりだ……」

僕は、アフリカが初めてであった。何度かネパールという国を訪れてはいたが、どうしてもネパールのたくましいポーター達との比較をしてしまう部分があった。いけないな、と思いながらも、どこかでここがネパールだったら……という何の解決も生まないことを思うのであった。

僕達は、泥んこの湿原を走り、峠の山道を先行する３人を追いかけた。彼らはまるで見当たらない。峠の直下にあるルンゼでポーターの荷上げ風景を撮影することにした。荷物を背負っていると登るのが難しいのか、なかなか手こずっている。そうこうしているうちに、10m程上を登っているポーターの荷物がいきなり大きく膨らんだ。頭にひっかけていたバナナの皮で編んだ紐がよりによって切れたのだ。荷物が転落してくる。ルンゼ内にいるので、まともに僕らを直撃してくる。

「うわー！」などと二人で騒いだところで何事も状況は変わらない。確実に僕らに向かって荷は落ちて来る。僕は転落してくる20数キロの荷を体を張って止める以外に方法はなかった。肩にはカメラを担いでいるから、左手一本しか使えない。イノーくんはマイクを持っているから、やはり片手で僕が落ちないように後ろから押すしかない。

「コノヤロー!!」ルンゼの中に揺れる二つの青春があった。冷汗がドッと出た。ポーターは、まじめな顔をして、僕の前で止まった荷を再び背負って登り出した。

「今日はどうもついてないな」僕らは再び登り始めた。

どうも思ったように事が運ばないのがアフリカなのであった。

先程まで青かった空がすっかり白く変わり、高度の影響か少々足取りが重く感じられるようになった頃、小さく光る三角形のエレナハットが氷河直下のモレーンの中に現れた。ポーター達と別れ、我々５人は狭い小屋の中に収まった。

翌、早朝、ヘッドランプの明かりを頼りに小屋を後にした。

氷河の取付きでアイゼンを着け、ロープを結んで一気にだだっ広い氷河上に出た。東の空が赤く輝き出し、冷気が肌を刺す。やがて朝日が僕らを包み、山々が色を帯びてくる。静寂な空気の中をアイゼンを軋ませて、双耳峰右側のピーク、マルガリータ峰を目指す。スタンレープラトーと呼ばれるフラットな氷河を通過し、小さな岩場をスタカットで登ると、あとは歩くだけだ。やがて、あっけなくスタンレー山塊の最高峰マルガリータの頂上に着いた。

感動はたいしてなかった。僕は冷静に撮影を続けていた。

「気分は、どうですか？」

「アフリカの山はいかがですか？」

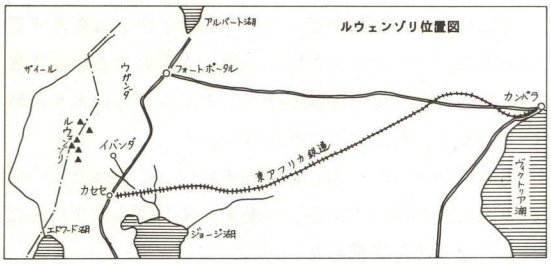
「山の魅力とはなんでしょうか？」

僕はありきたりのインタビューをしながら、返ってくる答えと自分の考えている事を比べていた。一段落してからカメラをおいて周りを見まわした。

「気持ちいいな……」と僕は思った。たぶんその単純な言葉だけで、きっとすべてを語れるのではないかと思った。

「つまんねえ質問をしちまったかな？」

僕は頂上を後に下降していく３人の姿をカメラに収め



てから思った。しかし、それも束の間、そんなことを考えている暇はない。自分も下降しなければならないのだ。仕事以上に、真面目にするいつもの作業なのだ。

＊

ルウェンゾリを目指した数日間、かつて本で読んだ時の新鮮な驚きや感動はなかった。それはどこかで気づかないうちに失っていたものなのであろう。その代わりに時々、日本を離れて見知らぬ土地を歩いていると、ハッと忘れていたことを思い出したり、思いもつかなかったことを発見したりすることがある。

イバンダ村からカセセへ戻る車の荷台で感じた心地よさは何であったのか。ひとつの目的を達し終えた解放感なのか、山から下りて安全圏に入った時の安心感であったのか。あるいは、おそらくそれは都会にいては決して思い出すことのできない忘れかけていた瞬間だったのであろう。

登山隊／今井通子　早川晃生　大矢正彦
撮影隊／村口徳行　井納吉一

モンゴルの山旅

昭和61年法学部卒　原田　雅子

草原の国　モンゴル

女子登攀クラブでモンゴル人民共和国に登山許可を申請している、との話をクラブ会員の村口妙子さんから聞いたのは1988年春の事だった。草原の国モンゴルに登るような山があるのだろうか……。そう思いつつも、モンゴルの雄大な草原、青い空といったイメージと共に、大学卒業以来“海外に出たい病”におかされていた私の心は、はやモンゴルに飛んでいた。

今回のモンゴル登山は、'86 年に田部井淳子さんがモンゴル政府に対し登山許可を申請し、3年後の'89 年にその許可がおりたことから実現へと動き出した。過去モンゴルへ登山に出た日本のパーティーは、'68 年東京外国語大山岳会隊（隊長・小沢重男氏）、'84 年ＨＡＪ会員隊（隊長・大崎正信氏）等が、それぞれハルヒラ山群、ハンガイ山脈オトゴンティンゲル山(4,031m）に登頂している。社会主義というお国柄からか、東京外大隊もＨＡＪ隊も登山許可を得るのに相当な苦労をしていて9年、10年の月日を費やしているのである。今回、私たちの隊に3年という短期間で許可がおりたのは、田部井さんのアプローチが強かったことと、“ソ連の16番目の共和国”と言われるモンゴル人民共和国でもペレストロイカが進んでいることによるものと思う。

'89 年3月、第1回ミーティングで隊員、行程等の概要を決めた。隊の名称は「日モ友好女子交流登山隊」。日本とモンゴルの女性登山者による合同登山である。山域はハルヒラ山群ツルゲン峰。モンゴル政府に概要を送り、返答を待つがなかなか返事が来ない。モンゴル政府より日本の外務省宛に返事が来たのは、出発予定日に迫った6月中旬。その内容は、“モンゴル体育・スポーツ国家委員会は、タベイ・ジュンコ等6名の女性登山家代表団の受入れを承認した”“受入れ期間は7月10日より24日までで、所要経費はモンゴル側が現地通貨にて支払うこととし、代表団は右に相当する金額を登山用品で支払い、更に不足額を生じる場合にはドルにて決算を行う”というものだった。山域、行程、モンゴル側登山隊の編成等詳しい返答はなかったが、まずは許可がおりて一安心。7月7日の出発に向け、準備を進めた。

日本側のメンバーは、モンゴルに興味を持つ女子登攀クラブ員で、みな豊富な海外遠征の経験を持つ人ばかり。海外遠征未経験者は私1人だった。隊員構成は以下の通り。

日本側隊員		モンゴル側隊員	
隊長	田部井淳子(49才)	総隊長	バットバイル（46才）
	福島由利子(31才)	隊長	ナイダン（57才）
	三上由子（31才）	副隊長	バインツァガ（38才）
	村口妙子（30才）	女性隊員	リッチンノルブ(57才)
	原田雅子（26才）	〃	ブルベ（44才）
		〃	ザイアー（42才）
		〃	ダワスレン（33才）
		〃	ツェツツュグマ(32才)
		医師	デリック（60才）
		男性隊員	バットルング（38才）
		通訳	バッチャルガル(31才)
		地元山岳会より男女10名	

勇士の三競技

6月に起きた中国天安門事件で、入国ルートを中国よりソ連経由に変更。日本を出てから4日目にしてモンゴル人民共和国の首都ウランバートルに着いた。人口 205万人、国土面積 156万7000㎢（日本の約4.1 倍）、公用語はモンゴル語（表記はロシア文字を使用）、国全体が高原に位置し、ウランバートルは 1,351mの高地にあり、湿度が低くさわやかに感じる。寒暖の差が大きい大陸性気候で、冬は－40℃になることもあるそうだ。

入国翌日の7月11日は革命記念日で、国をあげてのナーダム祭のために全国から人々がウランバートルに集まって来た。

モンゴルには3つの国技がある。相撲、弓、競馬の“勇士の三競技”。さすがチンギス・ハーンの国。全国から予選を勝ち抜いた人々がナーダム祭でその腕を披露し、モンゴルーを決めるのだ。入山前の2日間、私たちはナーダム祭を見て廻った。

袖なしチョッキにパンツという姿で、土俵のない大地で競い合う相撲力士。勝った力士は勝者の舞いを踊る。体格は日本の力士の様に太ってはいないが、全身筋肉モリモリといった感じ。取りくみを見ていると、レスリングに似ている。

民族衣装に身をかため、長い弓を巧みに操る弓術。あんな弓の標的にされ追いかけられたら、さぞ恐ろしかろう。弓よりも色とりどりの衣装をみている方が楽しい。

そして圧巻は競馬。バスで郊外に出た私たちの目の前を、まだ7歳位の子供たちが土煙りを上げ馬で走り抜けて行く。聞けば子供の部の30kmレース。大草原になだらかに続く山の端から、続々と馬の列が駆け抜けて行く壮観。まるで馬が体の一部かのようだ。華やかな民族衣装を身につけ、一生懸命走っている姿は子供とは言えすごい迫力だ。“モンゴル人は千里眼”と言われるが、まさにその通り。「馬の先頭が来た」とモンゴルの人々が騒いでいても、私たちには見えない。

馬の列がとぎれ、ふと目を転ずれば、そこはただ一面の草原に風が吹いている。「ああ、モンゴルに来たんだなぁ」とその時実感した。

ツァガン・デグリ峰へ

ウランバートルのホテルで今回の登山隊の総隊長バットバイル氏と、'68 年東京外大遠征の時の隊員、ゾリック氏に会った。「私たちが登る山はツァガン・デグリ峰です。 4,200m程の山です。」バットバイル氏のこの一言でツルゲン峰からツァガン・デグリ峰(4,286m）に変わった。

7月13日、モンゴル隊員と共に国内機でウランゴムへ。モンゴル機は、上空になると冷房を入れていないのにとても寒くなる。“天然クーラー”なのだ。上空を飛んでいる時は、寒くて寒くて、ガウンにくるまっていなければどうしようもない。途中、滑走路もない草原のまん中に着陸し、ヒヤヒヤする。ウランゴムからトラックの荷台に揺られ、大草原の中を一直線に伸びる道を、ひたすら走る。ただただ草原のものすごい景観。あたり一面の草原と、低くたれ込めた雲――なんてすごい所に来ちゃったんだろう!! 思わず走り出したくなってしまう。“来るが勝ち”なんて言葉が隊員からもれる。23時過ぎにツルゲン村に着。暗闇の中で幕営する。

7月14日、朝、目覚めると外が騒がしい。天幕内から外を伺うと、黒山の人だかりである。外に出て写真を撮ろうとすると40人位がワーッと押し寄せて来る。子供の

▲ナーダム祭の競馬、遠く山の端から馬の列が続く

顔、顔、顔。私達が目を向けると、恥ずかしそうにニコニコ笑いながら物陰に隠れようとしたり、天幕をポンポン叩いたりで大騒ぎ。私達がよほど珍しかったようだ。日本人にとてもよく似た子供達の顔。日本の子供も20年位前は、みんなこんな顔をしていた。赤いホッペに鼻水たらし、いたずら大好きといった表情。モンゴルの子供に、大草原に生きる力強さを感じた。

◀ツルゲン村の子供たち

ツルゲン村から車で川を渡り、馬でのキャラバン開始。その馬に乗ったは良いが、歩き始めて馬に調子を合わせるのに一苦労。日本隊員には馬方がうしろに同乗してくれるが、みんな目が点になっていた。鞍に乗ってはいるものの、とにかくお尻が痛い。１本する毎に、馬から降りると足がガクッとしてしまう。お花畑の続く山路をのんびり馬に揺られ、お尻の痛みに耐えつつ丸１日で標高2,800m程のＢＣに着いた。もう23時。ＢＣには２～３日前に入山していたモンゴルの女性隊員が幕営していた。ラクダに乗せた荷物が来ないので、幕営していたテントに逃げ込む。

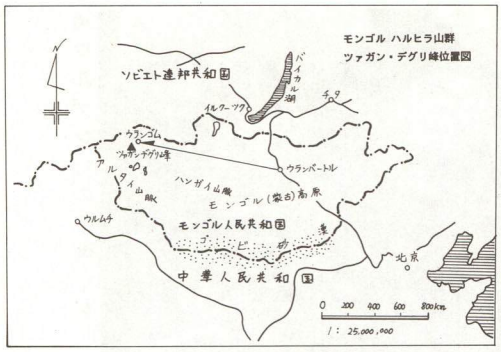
７月15日、入山式を行う。この時になってモンゴル側の隊員構成がわかる。ウランバートルの体育スポーツ協会員の女性５名、男性４名。みなスポーツマスターという資格を持った登山家で、国家行事として参加している。女性隊員の体格の素晴らしさ!!　毎日５㎞マラソンしているとのこと。57歳になるリッチンノルブさんも参加している。地元の山岳会からも男女10名参加し、カメラマン、通訳等、全員で26名の大部隊となる（こんなになるとは、私達も予想していなかった）。

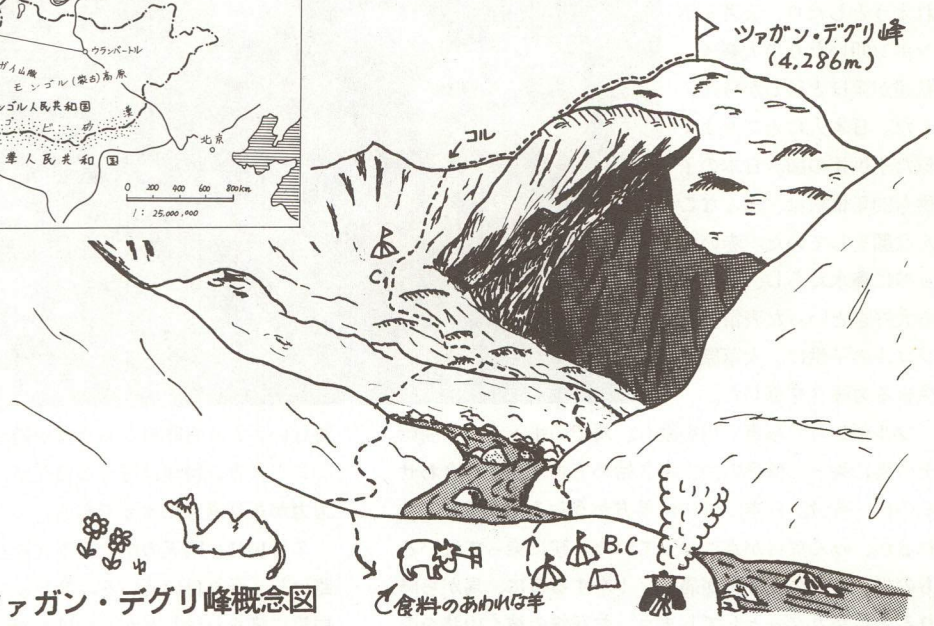
入山１日目で体調を崩した私は、吐き気と微熱で、入山式もそこそこに１日中シュラフにもぐっていた。そんな私に追い打ちをかけるかのように、天幕外ではモンゴルの隊員が、入山時から連れていた羊を一頭バラしているではないか!!　「雅子ちゃん、見てごらんよ」という妙子さんの声にノソノソと起き出した私は、遠目に見えるその光景に思わず“ウッ”としてしまった（羊の肉からは湯気が立っていた!!）。しかし目はその光景を離さない。モンゴルの人々の主食は羊肉。夕食時に羊肉のスープを出していただくが、臭いが鼻についてなかなか進まない。どうも昨日から臭覚が過敏になっているようだ。ジンギスカン料理は好きなのだが、本場の料理はどうも迫力があり過ぎたようである。

７月16日、晴天の中、Ｃ１（約3,400 m）へ向かう。路はしっかり付いている。３ピッチ目で氷河となる。途中雪に降られはしたが、やはり暖かいのか、氷河には雪解けの水が小川になって流れている。私には初めての氷河で、蛇行する氷河にも感動したが、その上を小川が流れている様子には、何とも不思議な感じがした。青空に変わると、クレバスが口をあけて待っていた。モンゴル隊員はザイルも着けずにズボズボと行ってしまうが、ヒドンクレバスが氷河を横断しており、ようやくザイルをフィックスする。モンゴルではザイルを着ける習慣が薄いのか、こちらが言わなければなかなかザイルを出してくれず、ハラハラした。所々ヒドンクレバスがあり、ザイルを着けたままＣ１へたどり着いた。

７月17日、６時40分にＣ１を出発し、頂上を目指す。１ピッチ目のクレバス通過で時間をくう。Ｃ１から一気に稜線へのコルに出、稜線をたどる。素晴らしい晴天の中、ヒドンクレバスに注意してアンザイレンで進む。4,000m付近でアイゼンを着けるが、この頃から頭痛がひどくなる。他の隊員は皆元気そのもの。モンゴルの女性はとにかく強い。にせピークに何度も騙されつつ、11時ツァガン・デグリ峰に着いた。山、高原、湖沼が広がる大パノラマ。モンゴルの人々の笑顔。大学卒業から今日までの日々がフーッと私の頭を流れた。今、こうしていられる喜びを多くの人に心の中で感謝した。

大きな雪庇の発達した狭いピークで全員の記念撮影をし、記念品の入った小さな壺を埋め、下山にかかる。15時にＣ１に着き、その日の内にＢＣまで降りた。





ツァガン・デグリ峰概念図

7月18日、下山式。モンゴル人隊員から多くのプレゼントをいただく。中には陶器の人形があったりして、どうやってBCまで持って来たのだろうと感嘆したり。私たちの胸元は贈られたバッチでいっぱいになる。私たちは電卓や地図、山道具をプレゼントした。

下山式が終わると、田部井さんのエベレスト遠征の話をして欲しいとの要望で、青空教室となった。モンゴル人にはエベレスト登頂者がいない。モンゴルの登山家のエベレストに対する熱意を感じた。

7月19日、再び馬に乗りツルゲン村へ。お尻の痛さに閉口し、乗馬を拒んだ私はモンゴル人に笑われてしまった。子供の頃から馬に慣れ親しんでいるモンゴルの人々

▶頂上にて

▲ツァガン・デグリ峰

にとっては、馬に乗れないなんて、信じられない事だったに違いない。しかし、ＢＣからツルゲン村まで続く一面のお花畑の素晴らしさ!!　花・花・花と、様々なお花がこれでもかと姿を見せる。これ程のお花畑は日本では見られない。実は、私はこのお花畑の中を、自分の脚で歩いてみたかったのだ。馬を降り、トラックで増水した川を渡るのに１時間川の中で立往生し、ようやくツルゲン村に着く。そしてまた人だかりに囲まれる。

＊

出国から帰国まで18日間、うち登山期間７日間。あれを見てもこれを見ても珍しく、“誰々があんな事している”と言っては笑い合う楽しい遠征だった。そしてモンゴルの登山家の人々の温厚で誠実な人柄。トラックに乗っている時も、誰とはなしに出た歌声が大合唱になったり、白熱したジャンケン大会になったり。頂上に立つ時も、手を差し出して私達を山頂に立たせようとする。度々温かいものを感じた。

私には初めての海外遠征、合同登山ということで、感じる事も多々あった。海外に出て新しい物、環境に触れると、自分の今の位置みたいなものがより明確になるように感じる。それは、また新しい自分の発見でもあり、次へのステップになる。 4,000mで高山病にかかったり、ＢＣで寝込んだりしたのはショックだったが、このモンゴル行で新しく見えて来た事がたくさんあった。

東京に生活する今、モンゴルの遊牧民の人々が昔ながらの大草原で羊を飼い、馬を交通手段とし、ゲルで生活している事を思うと、今も何とはなしに不思議な思いにかられるのである。

マナスルを越えるツル

――1989年 秋 ――

ツルは必死に羽ばたいていた。思っていた
優雅な舞いなどとはほど遠いものであった。

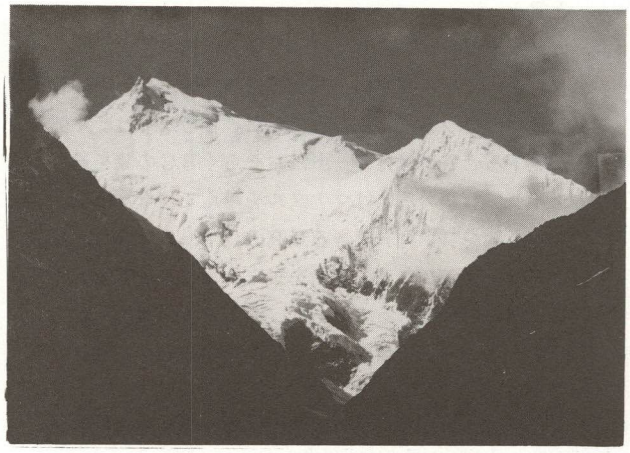
村口 徳行

９月15日、つかの間の睡眠の後、僕達は大型バスに荷を積み込み、カトマンズを後にした。メンバーは、僕と桜井くん。二人ともカメラマン、そして今回の仕事をサポートしてくれるシェルパ達。サーダーは、かつてからの知り合いダワ・ギャルツェン、信頼のおけるやさしい男だ。

1989年ポストモンスーン期、僕達はヒマラヤを越えてゆくツルをＶＴＲに収めるべくマナスルを目指した。

マルシャンディ・コーラ沿いにキャラバンを進め、5,200mあるラルキャ・ラを50人近いポーターと共に一人の脱落者もなく越え、マナスル登山口の部落サマに着いたのは９月23日であった。

そのままポーターの入れ替えをせず、ＢＣまで荷上げをしたいと思っていたのだが、このサマという部落民は少々いわくつきの人々で、かつて日本隊がえらい目にあっていることでもわかるのだが、思ったようには事が運ばないのである。しかたなくポーターの総入れ替えと、おまけに高い給料の要求、普通１日で行ける距離を２日間かけるなど、マナスル地域の相場を基準に我々も受け入れざるを得なく、僕とサーダーはエヘラエヘラとにが笑いをするのであった。



▲ラルキャ氷河方面よりマナスル北面と北峰

順化を終え、9月27日、ゴンパ（寺）で登山の安全祈願をしてもらい、サマをスタートする。ポーターは、大半を女性が占め、小学生くらいからバアさんまでの年齢層で構成された。細々とつけられたマナスル氷河左岸の道を、時々撮影をしながらポーター達と登ってゆく。まだ充分歩ける時間ではあるのだが、 4,200mのカルカでこの日は終わりとなる。

一人のたくましい若者がカルカに着いてもなお先へ行こうとする。僕は腕組みをしてその様子を見ていたわけで「ウーム、サマにもなかなかやる気のあるヤツがいるではないか」と感心していた。まわりのポーター達は、彼に向かって「何言ってんだ、おまえは、ねぼけてるんじゃネエ！」と言っているのだと思うが、皆から罵声を浴びせられている。若者は、うら若いねえちゃん達に無理やり連れられてサマ部落へ戻っていった。彼は少々頭が弱いらしく、外に置いてあるものはすべて回収してしまう男なのであった。僕達としては、その男は荷をたくさん背負うし、モンクは言わないし、えらく評価しているのだが、まわりはそうでもないらしい。翌日 4,700mにＢＣを作り、10月１日、米を投げツァンパを天へ投げてＢＣ開きをした。

桜井くんとツルの飛行ルートと撮影ポイントに関しての打ち合わせをする。飛行ルートには２つの可能性があって、ひとつは、サマ部落およびその周辺からマナスル氷河の上昇気流をつかんで舞い上がってくるという説と、もうひとつはダイレクトにチベットサイトから飛行してくるという説がある。

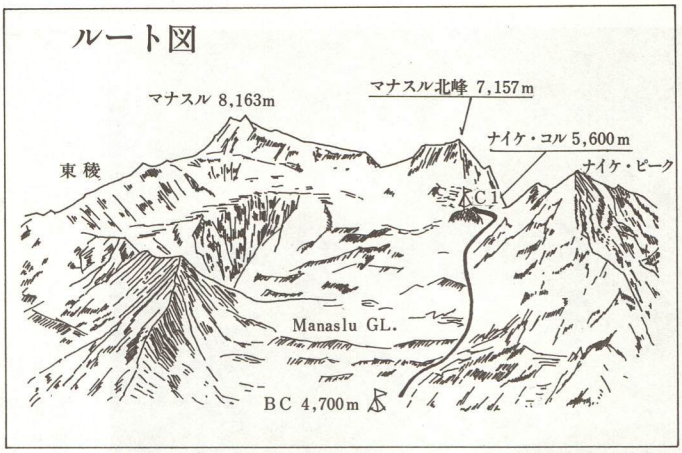
サマで長老にツルのことを聞いてみた。

「天候が悪い時には、マナスルを越える前に一度谷におりて休む。天候が良い時は高い所を飛ぶ……」

と言う。

カメラポジションとしては、偵察した結果、 4,700mのＢＣとナイケ・コルの上部、黒岩(5,700m）と呼ばれる台地にカメラを据えることにした。ＢＣからはサマ部落が見下ろせる。飛行ルートはおそらくＢＣの脇を通ってナイケ・コルあるいはマナスルを越えてゆくだろう。下部・上部をフォローできる最高のロケーションだ。黒岩からは、ダイレクトに高所を飛来したツルをアップでとらえることができる。そして、もしマナスル氷河を上昇してくるなら、俯瞰の絵とＢＣからの中継をすることができる。

ＢＣに着いてからというもの、いやサマの部落に着いてからというもの、毎日僕たちは空を見続けていた。ツルが飛来するのは過去のデータから10月上旬から中旬にかけてもっとも多く、ＯＢの松田さんの見解によればモンスーン明けと一致すると言う。いつ飛んできてもいいように準備はしていたが、もしかしたらマナスル氷河にこない年だって充分ありうる。僕と桜井くんの会話は、「本当に飛んでくるかなあ？」というあとに「絶対に来る！　来ないでどうする」という、いつもながらの希望でしめくくるのであった。



10月６日、シェルパと共に黒岩に上がる。天幕をたて、整理を終えてシェルパはＢＣへ下りていった。偵察も順化も、荷上げもすべて完了し、僕も待つだけのポジションに入った。あとは、ツルが飛んで来さえすれば、それでいい。

10月７日、朝起きてみると雲ひとつ無い澄み切った空。モンスーン明けを思い起こさせる。今日こそツルが飛ぶ。僕は早朝からカメラをセッティングしてツルの飛来に備えた。日があたってしばらくすると上昇気流が上がってくる。氷河を見下ろす台地でじっとしていると体が次第に冷えてくる。時々、双眼鏡を取り出し、はるかチベット、マナスル氷河、プンゲン側と目を凝らして見まわす。飛ぶものといえば付近にいるカラスばかりで午後４時ぐらいまで待ったがツルは飛んでは来なかった。

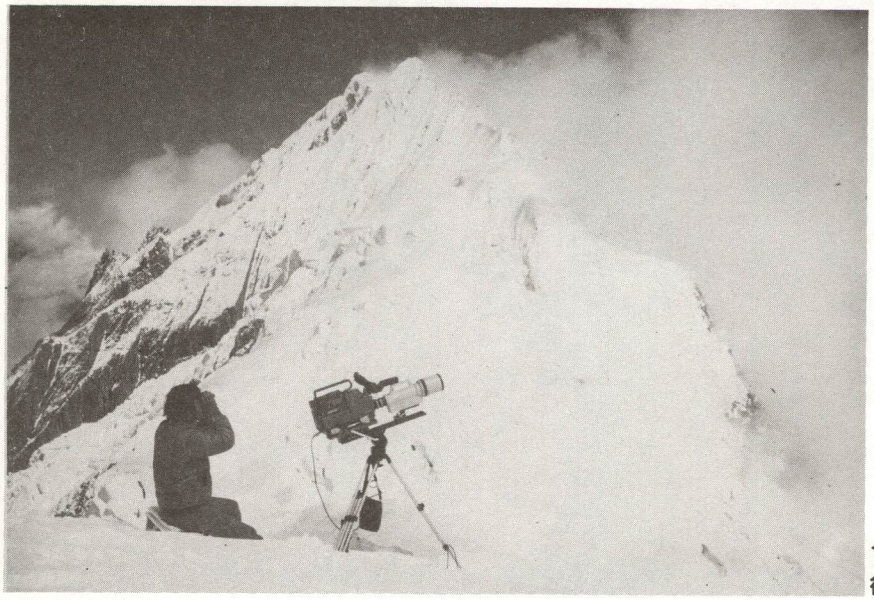
10月８日、またもや朝、雲ひとつない快晴の空。今日こそついにツルが飛ぶのか……　じっと待ちつづける。緊張が高まってくる。何か肌に感ずるものがある。時々舞う雪がツルに見えることさえある。午後12時ふと上昇気流がおさまり、太陽のぬくもりを感じる。

「近いな近くに来ているな……」今までの情報によれば、12時前後に一番多く確認されている。

２時頃、ブリガンダキの谷は雲で被われた。上空は青空だが次第にガスが湧きはじめていた。３時にもなると

感じていたものはだんだん薄れてゆき、雪が降り出した。
「今日も来ないのか……」一人言をつぶやきながらカメラをしまい、テントに転がり込んだ。しばらくすると無性に目が痛む。冷えた指をコンロで温め、目にあてると奥の方からじわっと疲れが癒されるようだ。何回かくり返すうちにテント内も温まり、しだいに体もほぐれてくる。
「ツルは一体いつ飛ぶのだろう……」僕はじっと待つ間、越えてゆくツルのコトを考えていた。少しの疑惑と不安を感じつつも飛来してくるその日を楽しみに待っていた。数日間空を眺めるようになって、不思議なことだが、それまで“本当に飛んで来るのだろうか”と思っていた疑問がしだいに無くなっていった。上昇気流が深い谷から吹き上がってくる。空に雪の結晶が舞う。雲が湧き、夕日が雪面を赤く染め、岩肌が立体感を帯びる。やがて静かに色を失ってゆく。繰り返される自然の中で、僕はほんのわずかだけど、ツルの姿を感じるようになっていた。まちがいなくツルは飛来する。僕はそう思うようになっていた。

10月９日、朝起きると雲多く、昨夜は10㎝の雪が降った。
「今日は来ないかなー……」と思って、相変わらずじっと空を見ていると、ＢＣ桜井くんからの交信。
「ツルは撮りましたか？」
「……何ですか？」
「ツルの撮影はできましたか」
「何言ってんだ、ツルなんか来ないゾ！」
「９時10分頃、一編隊がナイケ・コルの方向へ向かいましたよ」
「ここからは見えなかったゾ」
「寝てたんじゃないでしょうね」
「バカ言ってんじゃネエ」
11:00頃、再びＢＣより連絡が入る。
「来ましたよ！」
ここからは確認できない。「ツルが来たぞー」とシェルパを呼ぶ。二人で探すがまるで見えない。やがてシェルパが騒ぎだした。彼には見えるらしいのだが僕にはまったく見えないのだ。シェルパの指差す方向に目線を合わせて目を凝らしてみてやっと発見することができた。
「なんだ、ありゃあ」
小さな点がいくつも空中に浮いているという感じで、とてもイメージからかけ離れた光景だ。70～ 100ぐらいの数だったか、 6,000mぐらいの高度を保ちながら、はるか遠くを渡っていった。
どうしたわけか、あまり感動がない。待ちに待ったはずのツルの飛来なのに、あまりに遠すぎて、思っていたものとはあまりに情景が違いすぎて、そういうことなのだろうか。
10月10日、午前中に６～７のグループが続けて飛来した。はるかチベットサイトから僕のいる地点とはかなりの距離をおいて次々に渡っていった。
「マナスル氷河上空には来ないのか……」早朝からモンスーン明けとは思われない、どんよりとした天候で、マナスル付近は雲が多い。そんな理由でちょっと横にそれたのか、大自然の中の距離からすれば微々たることだ。



◀Ｃ１にてツルの飛来を待つ。後方はナイケ・ピーク。

▲アップで捉えたツルの姿は“アネハヅル”であることを確認した。

もっとも近づいた編隊はナイケ・ピークを絡んで気流にもまれ、編隊を崩しながらも、上昇を繰り返し、南西へ渡っていった。近くに来ようが来まいが、ツルは確実に渡ってゆく。

12:30、マナスル氷河の下方からツルの声が聞こえてくる。かなりの数だ。ついにマナスル氷河の正面からやって来た。しかし姿を確認できない。声がしだいに近づいてくる。確認できない。焦りが出てくる。

「どこだ……どこにいるんだ！」シェルパも見えないという。

いきなり後ろから他の隊のサーダーで来ていたニマ・テンバ（ヒマルチュリ隊の時のサーダー）が

「ムラグチさん、アップサイト、アップサイト」と言う。

僕は息を飲んだ。思わず溜め息が洩れた。

「うわあー」

いきなり頭上にツルの編隊がV字形を作って押し寄せてくる。青空に純白な翼が映えて神秘的な光景だ。さまざまな気流にもまれ、形を徐々に変えながらも、南へ向かって突き進んでゆく。

僕は 900㎜のレンズを着けて撮影を続けていた。

ツルは必死に羽ばたいていた。最初に思っていた優雅な舞いなどとは、ほど遠いものであった。山の空気を切り裂いて、ツルの甲高い声が幾重にも幾重にも重なって僕に迫ってくる。お互いが呼び掛け合い、励まし合っているかのようだ。

彼らは生き延びてゆくために、はるか高高度を命の限りはばたいているのであった。弱い者は脱落し、身もちぎれんばかりの冷気の中を羽を動かすことが生きることなのであった。一瞬でも羽ばたきを弱めようとすれば、それは死を意味する。生と死のギリギリのラインをツルは越えてゆく。なぜ、そうしてまでヒマラヤを越えなければならないのか。

やがて、マナスル北峰の壁をかすめて大きく孤を描き、視界から消えていった。

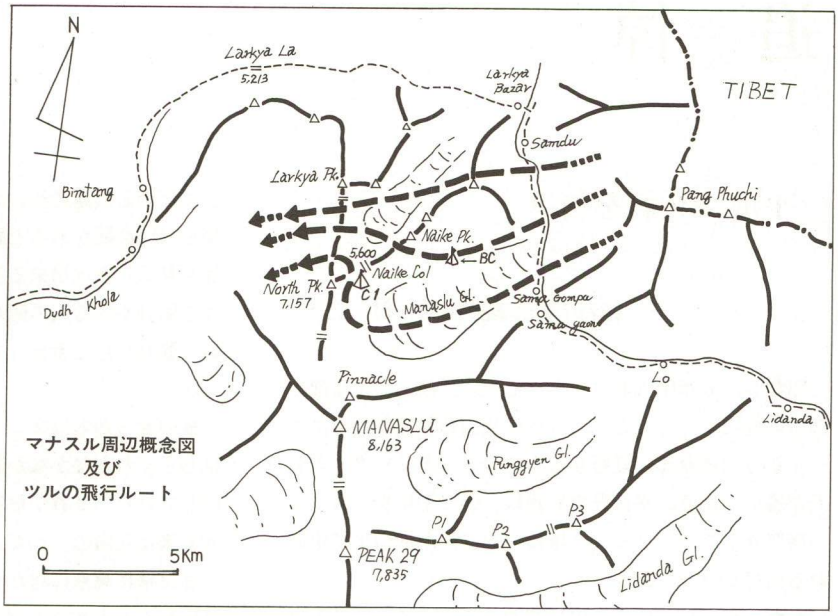
ただきれいだなどというなまやさしいものではなかった。生きる物が精一杯生きてゆく姿を、僕はこの目で見た。それはすさまじいばかりの生への羽ばたきであった。

▶ナイケ・コルを越えたツルは、ラルキャ氷河からの風に押しもどされた。上昇気流をたくみに利用して旋回をくり返し、ナイケ・ピーク上部に達したかと思うと、一気に西へむかって飛び去った。ツルの声が響きわたった。

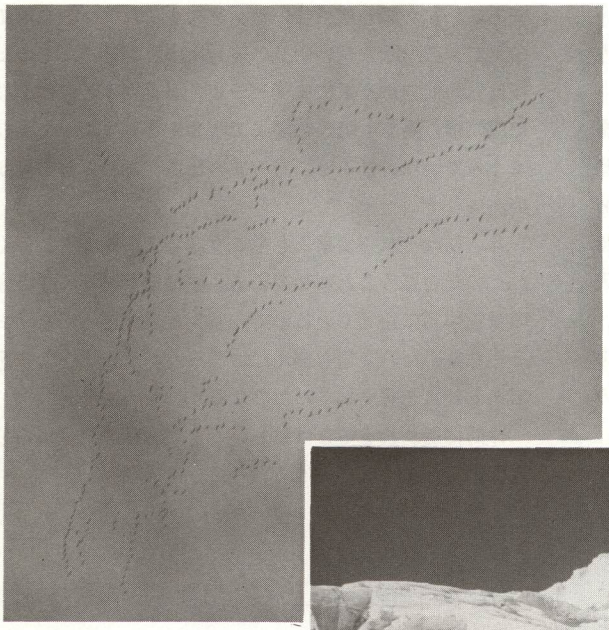
ヒマラヤを越えるツル……
氷と雪の世界の中で、僕は生命のメッセージを感じとった。それはあまりに激しく尊いものだった。

その後数日間、空を見つづけていたが、その一群を最後にマナスル上空を渡ってゆくツルの姿を確認することはできなかった。

はるかシベリア、中国チャンタン高原から、ヒマラヤを越えてインドへ渡って行ったツルは、そこで春を迎え、しばし羽を休めた後、再び北へ帰ってゆく。



マナスル周辺概念図
及び
ツルの飛行ルート



◀マナスル氷河上空を渡りゆくツルの群れ。10月9日、10日の両日にかけて、2,000余羽のツルがマナスル付近を渡っていった。思いもよらずとても激しい羽ばたきだった。

▶わがチームのスタッフ達。後方はピナクル。ＢＣにて。

追　悼

平沢一久君を憶う

昭和７年法学部卒　戸村　貞男

昭和５、６年頃は６月にもなると、三崎町の山岳部の部室の壁に、ぐるりと７、８枚の登山参加募集のポスターが張り出される。登行する山やコースとリーダーの名前が書いてある。平沢君の計画は、いつも中央アルプスや南アルプスで、リュックは重いし、汗が沢山出て草臥れる所ばかりだった。

私が平沢君について、山に関連して知っていることは、この位しか思い出されない。

従って、彼への追憶は彼が50年間頑張って来た社会人としての仕事のことになる。

月島から隅田川を10キロ程遡ると、墨田区と荒川区を結ぶ白鬚橋がある。更に 600メートル位のぼると、左側の川岸に古色蒼然とした木造３階建ての古家がある。彼に聞いたら、「あれは俺のところの事務所だ。作った時は新しかった」と言って笑った。そこから左の運河に入って行くと、隅田川貨物駅や日本石油の油槽所がある。この南千住あたりが、彼にとって、初期・中期の仕事の根拠地であった様である。今でも近くの泪橋の交差点の角に、彼の主力会社である昭和通運の本社がある。

彼は日大卒業そこそこに、いや在学中から事業に専念して急速に業務を拡大して行った。事業の内容は主として一般運送業、鉄道通運業、回漕業で、扱品目は一般貨物と石油であった。

彼の業務が戦後特に飛躍したのは、日本経済の回復と石油需要の異状とも言える拡大に依るものであった。彼の目標のたて方は正しかったことになる。

私の知っている現在の２、３の会社を紹介しよう。

昭和通運㈱　資本金１億。一般、鉄道運送
　社員 160名、営業所10ケ所、貨物自動車 100台

平沢運輸㈱　資本金１億２千万。石油輸送
　社員 450名、石油タンクローリー等 200台

昭和油槽船㈱　日本沿岸・近海にて中小タンカー船に依る石油輸送。前記会社の10倍以上の規模。本社はサンケイビル。平沢君はこの大会社の半分を所有

まだ小名浜運送㈱、ミヤコ紙工㈱があり、他にも私の知らない会社があると思う。勿論、自分１人でこれ等会社を見ることは出来る筈がない。そこで彼は日大卒業年度を同じくする人の昭八会の仲間を各会社へ、１名、２名と張り付けて手伝って貰って、今日に至った次第である。

彼のせっかちはまこと有名なことですが、人を見る目はじっくりとなかなか確かで、見込んだ人をトコトン信頼していた。これが信頼した仲間と一緒に仕事を発展させて来た理由の一つだと思う。

私は常に東京に居たし、若干運送業関係の友人も持っていたこともあり、夕方になると度々誘いを受けたものである。私が酒も飲めないしダンスも踊れないのを承知の上で、数十回も、いやその倍もよばれて遊んだものだ。彼は私の前で得意気にまずビールをがぶ飲みし、どんなに広い踊り場でも隅から隅まで所せましとワルツを踊りまくっていた。まことに男っぽい仕儀と言わざるを得ない。

今、私はそれらの事どもをこう考えて、御馳走してくれたのだと思うことにしている。彼は仕事をみんな自分の学校仲間に任せているので、多少意見が違っても、おそらく言いたい文句も言えないだろう。そこで、私の前でストレスを解消していたのだろう。

仲間に逝かれることは淋しいことだ。私の記憶からも遠のいてしまう。

岳友 佐藤耕三君を偲ぶ

昭和14年建卒　前田　一二

どういう訳か山でお会いした記憶はありませんが、とにかく中学生時代の頃より合っていた気がする彼です。佐藤君の時代と思いますが、大阪薬専に野口君という人間の型破りの山仲間が居て、良くスキーや芦屋のロックガーデンで岩登り等をして遊んだことを思い出すので、その中に彼が居たのかも知れません。

私には非常に懐かしい男です。佐藤君と初めて会った

のは、神戸平野の私宅へひょっこりと現われ、私が長い間音信不通で居たので山岳会費の催促か、東京の岳友の様子を見て来いとのことかと思います。

その後津村君を案内して私の退院見舞いに来てくれました。関西桜門山岳会の行事には殆んど彼が計画し、会長菊池以下が参加するという格好で、彼が居ないと山歩きに不自由です。これも仕方のない事です。彼が余りに酒好きで、彼の膵臓も付き合い切れなかったのでしょう。

彼は印さんと自称し、岳友もその他の友人も彼の顔を見れば、“ああ印さん”と先に口から出る程親しい呼び名です。

山歩きのスタイルは何時もワイン色の地に黒の大柄チェックのスポーツシャツ。夏でも冬でも同じで黒サージのズボン、山靴にチロルハット。ちょっとギョロ眼で印度人風の色黒。犬歯が少し目立つ顔、良かったですね。そんな印象です。

彼の得意の山は関西では比良連峰ではなかったかと思います。何時でも案内すると言ってましたが、実現しませんでした。山歩きは六甲山へ2、3度。帰りに御影廻りで置塩宅へ御馳走になりに。冬は林先輩共々伯耆大山へスキーに、秋には湖東三山へ、又加賀の白山の麓へとご一緒しましたが、何時でも何処でもハイサックに一升瓶で楽しんで居りました。その一杯の嬉しそうな顔が思い出されます。

彼の発案で失敗したのは一度だけ。京都北の鞍馬山で春先のこと、到着してさあ一杯の宿舎が、廃業でなかったのです。印さんもこれにはびっくりした様です。その照れ臭そうな顔もなつかしく思い出されます。困った男ですね。私より早く死ぬとは。

関西桜門山岳会を代表して一番お世話になった私が、追悼文を書きました。

登山計画の近況

（桜門山岳会会員）

現在、会員の間では、それぞれのスタイルで面白そうな山行が計画されています。そのいくつかを紹介します。

“パミール”ソ連の山々への魅力

昭和43年経済卒　中村　進

世界の 8,000m峰を連ねるグレート・ヒマラヤの北側は、トランス・ヒマラヤと呼ばれ、いくつもの 7,000m級の山々が屹立しています。

トランス・ヒマラヤは珠玉の山と言われる聖山カイラスを中心とし、チョモランマやマナスルなどのグレート・ヒマラヤがこの地球に現れるより1千万年も早く、古代ユーラシア大陸の南方に出現を始めていたと言われています。

パミールの山々は、そのトランス・ヒマラヤの一部なのです。パミールの山を眺め、登山を行うのは、まさに地球最古の山への旅を想わせる魅力を感じます。

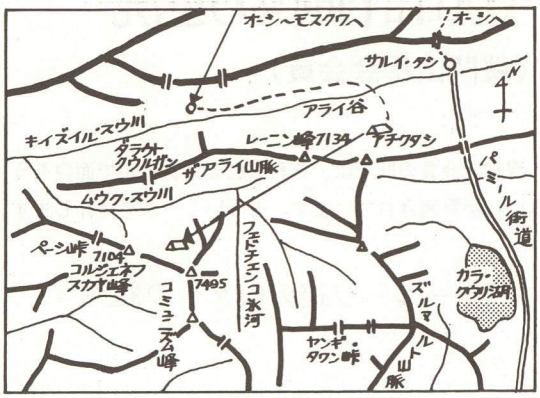
さて、パミールを代表する3つの 7,000m峰は、スターリン峰、レーニン峰、そしてコルジェネフスカヤ峰です。その中で、ソ連の最高峰でもあるスターリン峰、7,495m（現在はコムニズム峰と呼ばれています）は、1933年9月2日ソ連のタジク・パミール遠征隊によって初登頂されました。今から57年も前のことです。この最高峰コムニズムの初登頂はソ連の近代スポーツ登山の幕開けともいえる記念すべき日となりました。現在、外国の山へ登山に出かけることが難しいソ連の登山家にとって、最高峰コムニズムはあらゆる意味でソ連を代表する山のようです。

日本の登山隊としては、1966年に労働者スポーツ登山隊がレーニン峰(7,134m）を登り、それ以後パミールを訪れる日本人登山隊は年々多くなっていきました。

近年、ソ連の開放政策が一段と進められていることもあって、パミールの国際キャンプは日本隊を含め、毎年各国の登山隊で賑わっています。

一方、日本人は古来より山をご神体として崇め、恐れ、信仰してきた永い歴史があります。日本の山登りは、スポーツとして発展してきたソ連の登山や、近代アルピニ

パミール国際キャンプ地概念図



ズムを生んだヨーロッパの登山と比べると、やはり山や自然に対する歴史的背景の違いから日本特有のスタイルが生まれたわけです。

今日では、そうした歴史的な背景を越えて、世界の優れた登山家たちは「より困難な登山」を目指し、アルピニズムという共通した意識の中で高いレベルの登山が行われています。しかし、世界の先鋭達でも私たちでも外国の山へ行けば、やはりその国の社会や習慣を尊重した上で登山をしなくてはなりません。

チョモランマはネパールから目指せば、山名もサガルマタ（大空の頭）と変わり、シェルパ族の協力を得た登山になれば、彼らの山に対する信仰心を理解しなくてはなりません。チベット仏教を信仰するシェルパの人達は、ヒマラヤの山々を「神の住む場所」として崇め、山中での不浄な行為は絶対にしてはならないと考えています。例えば、動物を殺すこと、聖なる火を汚すことなどです。最近はなくなりましたが、日本人は火の上に網をのせてスルメを焼いたり肉を焼いたりするのが大好きですが、これは信仰心の厚いシェルパの人にとっては「聖なる火を汚す」ことになるのです。この事で実際にトラブルを起こした日本の登山隊があります。ヒマラヤの山中で不浄な事をすると「大ナダレが起こる」「大洪水がおこる」そして、「大きな落石が起こる」と、今もシェルパ族の人達は信じています。

一方、中国からチョモランマを登れば、中国のルールに従って登山をしなくてはなりません。

このように、国により様々な違いがありますが、この様々なお国柄がまた登山を味わい深いものとし、山だけでなく人々の相互理解を深め、さらにその国の社会や習慣をよく知ることになるのではないでしょうか。

山を単なる登山の即物的な対象に終わらせることなく、これからは、山からもっと色々なことを学んで行きたいと思っています。

登山をスポーツとして今日まで発展させてきたソ連。そのスポーツ登山の中心的な舞台であったパミールの山々、そこではどんなお国柄が見られるか、私の興味は尽きません。

尚、登山計画は1991年７月、コムニズム峰(7,495m)とコルジェネフスカヤ(7,105m）を予定しています。

（1990年６月９日）

チョー・オユー峰（卓奥友峰）熟年登山隊1991

基本構想

1．登山隊名称　チョー・オユー峰熟年登山隊1991
　（シルバータートゥル・卓奥友峰登山隊1991）
2．目　　的　西北西稜からチョー・オユー峰(8,201m）の登頂　中国・チベット側からのルート
3．期　　間　1991年９月１日～10月５日　約35日間
4．隊員構成　原則として満50才以上で健全な精神と登攀意欲を持つ者
5．参加予定者　熊谷義信、大城　泰、池田錦重、小島藤司、根津皖一、神崎忠男、山平　靖、平野隆司、松永敏郎、倉知　敬、加藤　勝、加藤朝章、大山　昇
6．予　　算　1,300万円

行動予定

９月１日　成田発→北京着
　３日　北京発→ラサ着(3,700m)
　４日　ラサ発→白居寺経由→シガツェ(3,880m)
　５日　シガツェ発→シガール(4,300m)
　６日　ティンリでシェルパと合流→ジャプラ氷河舌端にキャンプ(5,000m、車の最終地点)
　７日　ヤクにてパルーン放牧場経由ＢＣ(5,700m)建設
　８日～18日
　　Ｃ１(6,400m）の建設と隊員の高度順化期間
　19日～29日
　　Ｃ２(7,200m）、Ｃ３(7,700m）建設と登頂
　30日　ＢＣ撤収
10月２日　ラサ到着
　４日　北京到着
　５日　成田帰国

基本事項

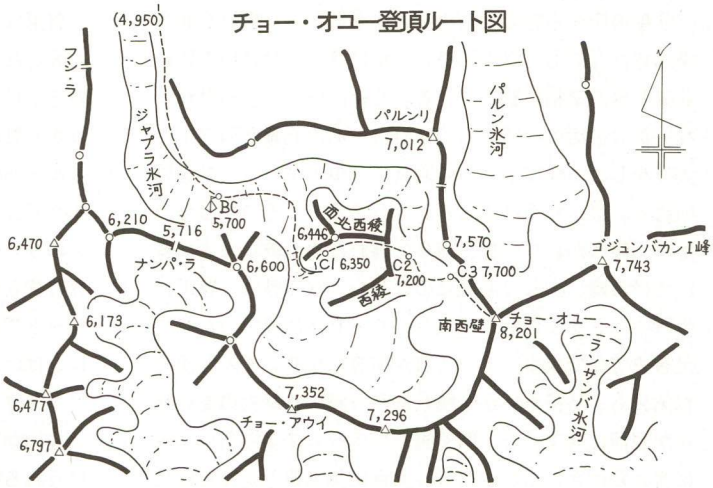
▷原則としてＢＣまでは全体計画を立て、その計画に準じて行動する。

▷ＢＣ以上については、各自２人以上でチームを組み独自の行動計画を作り、他チームとの調和・調整を保ちながら登山行動を実施する。

▷隊長は、指示・命令の権限を持たず、各チームの行動の調整、コントロールに努める。従って隊長には従来の登山責任は生じない。よって登山の推進は各チームリーダーのタクティクスと判断によって行われ、全体の流れ（行動）を把握するために各チームリーダーは行動を隊長に報告する。

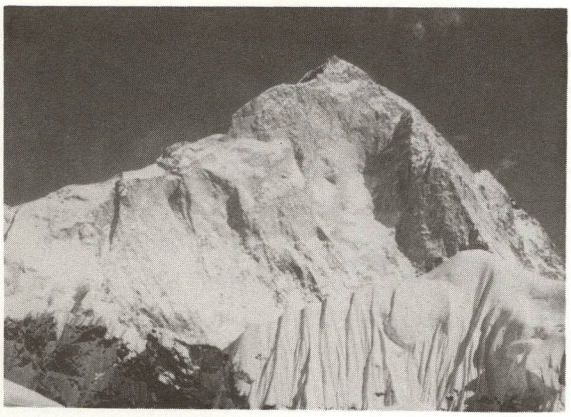
▷参加者（隊員）は、自分で判断し、行動し、責任をもって登山をする。いわゆる自主（自由）登山を認識した登山を行う。　（1990年９月）

チョー・オユー登頂ルート図



マカルー登山隊1992

目　　的　北西稜からのマカルー峰(8,463m）の登頂
期　　間　1992年８月上旬～11月中旬
参加予定者　岡田貞夫、村口徳行、その他数名
日　　程　1992年８月上旬　先発隊日本出発
〃　中旬　後発隊日本出発
〃　下旬　カトマンズ発(ダランバザール～ツムリンタール～シブトン・パス～BC)
９月１日　登山活動開始
10月31日　登山活動終了
11月上旬　ＢＣ撤収
11月中旬　カトマンズ着



▲マカルー北西稜。アイランドピークより。

現在、マカルー隊は書類上の手続きをしている段階で、まだネパールからの正式許可は下りていない。本格的な準備活動は約１年前からスタートする予定。

この計画の重要なポイントは、すべての面で無駄を省き、有効な時間の使い方を考え、経費を最小限に抑えること。そして、効率の良いトレーニング方法を採用し、持続するという点が基本ラインである。（1990年８月）

マカルー計画

―――――― 昭和47年経済卒　岡田　貞夫

２月18日、現役学生４名によるヒマラヤ登山隊の出発を成田で見送る。憧れだけの思いから猪突猛進ともいえる第一歩が始まり、コーチ会での検討、練り直しを何度も繰り返し、どうにか形が整いネパール行きのチケットを手中におさめ、少しの不安と大きな期待に嬉しさを隠しきれない隊員。その彼等を見送る羨望のまなざしの学生達の心中は、より一層私に伝わってきて20年前の自分の姿がだぶっていた。

シタツツラ隊を見送る羽田で、「次は君の番だぞ!!」と、当時私の名前など知らなかったはずの先輩高橋さんが、強く私の手を握って言葉をかけてくれた。次は自分にもチャンスが来るかもしれない？　きっと今、見送る学生の気持もあの時の自分と同じ思いに違いない。この刺激が彼等にとって衝動と言ってもいい情熱に変化し、成長していくに違いない事を強く望んでいた。久しぶりに晴れ間ののぞいた空にビールの酔いも手伝って、懐かしさとすがすがしい気分で帰途につき、これからの自分

を考えていた。

学生の頃から秀でたものなど何もなかった自分が40才を過ぎた今でも、現役部員と一緒に登り、共に山を語れる楽しさを幸福に感じている。変化に乏しく、感動が少ない都会生活の中で、あの当時の、あの光景が頭の中で大半をしめる様になり、雨期真っ最中のキャラバンを思い出す。湿った毛布にヒルが入り込んでくるのではないかと、寝つかれない夜、前日の濡れた物も乾かぬまま身につける時、少しでも先にのばしたくなる動作、靴下は歩行中もおかまいなく侵入してくるヒルに吸いつかれて足首まで血で染まっている日が何日も続く。そんな沈んだ気分も、時折かすかな晴れ間から輝いた純白の高い峰々が眼前にせまると、暗く重たいチームの雰囲気は一気に吹き飛ばされる。山こそ、まさに神の造り賜うた彫刻物と言う言葉がピッタリあてはまる。山の持つ魅力は魔力に変わり、禁断症状を起こしはじめる。

さて今度はどんな計画を作ろうか。手をつけたい相手は沢山あるが、山でメシを食べていく訳でもないし、何度もという訳にもいかない。今度こそはピークの踏めそうな山にするか、でも同じく高い代償を払って休みをとるならば 7,000mチョットでは興味が湧いてこない。ヒマラヤの魅力の本質は高さにあると思う自分には、どうしても 8,000mに目が向かっていく。残り少ないチャンスにもし恵まれたとしたら、やはり登頂の確率より8,000m峰登頂者になる夢を選択するだろう。かといって 8,000mの高さがあればどこでもよいかと自問すると、それなりのこだわりを持ちたい。荘厳であり、素晴しい感銘を与えてくれる山に充分な時間を使って対峙したいと考えている。

中国側からのブロードピーク、ガッシャーブルムは未知の魅力はあるが、手続きに時間がかかり過ぎる。アンナプルナは美しくロマンを感じるが、どうも好きになれない。マナスルをツラギ氷河から挑むルートは、けっこういい線いくかもしれない。エヴェレストの西稜は先に残しておこう。やはり威風堂々とした独立峰のマカルーが一番好きだ。マカルーとは相性が良さそうだし、他の8,000m峰より明るさを感じられる山がマカルーだ。この山をブッキングしよう。

最近のネパール観光省は、お家の事情によるものと思われるが 8,000m峰の殆んどに、同シーズン、同ルートに少々の日数のズレをもって数隊に許可を与えているので、優先順位の確保が必要になる。現地登山局オフィスに直接出向いて仮ブッキングするのが得策でもあり早く済む。

費用は言うまでもなく全額を自己負担とし、生む事さえ大変な資金を確保し、無駄な流出をふせぎ、周囲に迷惑をかけない効率よい準備を行なう為の対策として、マカルー計画独自の会の発足と都岳連加盟が大切な事だ。

ルートは1972年に初登された南壁を、アルパインスタイルで、と書きたいが、そうは問屋が卸さない。フランスのリオネルテレイ等が全員で初登頂した北西稜しか自分に許されるルートはない。降雪後の雪崩に気をつかうルートであるが、ダブルアックスを使用する程には至らぬとはいえ、 2,000m近くは用意する事になるであろうフィックスロープ工作の関係上２パーティーは欲しい。

登山期間は45日、高所で日付け切れの日本食を食べ続けられる限度だ。

冬の近づくポストモンスーンは寒さと風へのタクティクスが大きなポイントになるだろう。

キャンプの数と最終キャンプの位置はこの登山の最重要課題であり、４ケ所と５ケ所では補給にかなりの差を生じ、シェルパに限って言えば質だけの問題では済まなくなりそうだし、登頂の成否に大きな影響を及ぼす事になる。難しい問題だ。高所用天幕１張が１人分の渡航費と大差がなく、資金面でも大きな痛手となる。

睡眠用酸素はフランスから輸入しなくてもカトマンズで調達可能だろうが、酸素があっても高所のもつ危険、恐ろしさに対しては無力に等しいと考えた方が無難だ。人間の順化、順応能力を遙かに越え高所衰退が進行し、生存の許されない世界に足を踏み込み、さらに遠くにある頂上に向かって進む為には、平凡な都会の生活の中で長期間、長時間の走り込みによって得られる毛細血管を発達させ、筋持久力を高めると共にクライマーハートを造らねばならないし、また確実に最終キャンプまで戻りつき、生きて帰る為の緊張感を持続させるだけの、より強い精神力を培う事が自分がマカルーに戦いを挑む為の必須条件である。

出発までの２年以上の歳月を、充実した短い準備期間だと感じられる仲間が３～４名いれば、幻想のマカルーは大きな希望となり、可能性の広がった現実の山となる。

その先には何があるのか、今は解からない。それでも真剣に取り組む中にも、楽しむ余裕を持ち続けたい。

そういう自分の存在を認識している今日この頃である。

(1990.3.31)

原稿募集

■「会報」では、皆様の投稿をお待ちしています。国内、海外、登山、紀行を問わず、身近な話題や、最新情報、評論、随想などフリーなテーマで結構です。字数の制限は特にありません。写真、地図、カットなど必要に応じて添付してください。

■また編集に関してのご意見、ご希望などありましたら編集部までぜひご一報願います。

■「会報」は自由な発想の場を提供できるものでありたいと思います。

■なお、原稿締切は4月30日とさせて戴きます。次回会報29号は、1991年6月を目標に作製したいと思いますので、ご協力よろしくお願い致します。

原稿送り先　〒115 東京都北区志茂4-37-2　℡03-901-5412　原田雅子宛

編集後記

■会報27号で原田雅子が後記に書いているように、少しでも新しい記録、情報などを皆様のお手元に届けることが会報の良いあり方だと思います。当初、この28号を作る段階では5月に発行する予定でしたが、例のごとく少しばかり(?)遅れての発行となりました。これには、たくさんの問題点を含んでいるわけですが、ひとつずつ解決していきたいと思います。

■実験的な意味も含めて、編集部の総力を挙げて次号29号へと継続させたいと思います。　1990年12月1日　編集担当　村口徳行

■前号、会報27号中に以下の誤りがありました。ここに訂正しお詫び申し上げます。

6ページ　コーチ名　松野豊→橋本健
19ページ　コーチ名　松野豊→橋本健
52ページ　コーチ名　古野淳→松野豊

■会報第28号編集委員
岡田貞夫
村口徳行
原田雅子

会報第28号

発行日　1990年12月20日
発行人　中　嶋　　啓
編集人　村　口　徳　行／原　田　雅　子
発行所　日本大学保健体育審議会山岳部
桜　門　山　岳　会
〒102 東京都千代田区九段南4-8-24 ／(部室℡)03-329-5725
製　作　オフィス・エム
〒201 東京都狛江市和泉本町1-2-12 3-D　℡03-430-4076
印刷所　豊文社印刷株式会社
〒201 東京都狛江市岩戸北3-11-12　℡03-489-0576 (代)